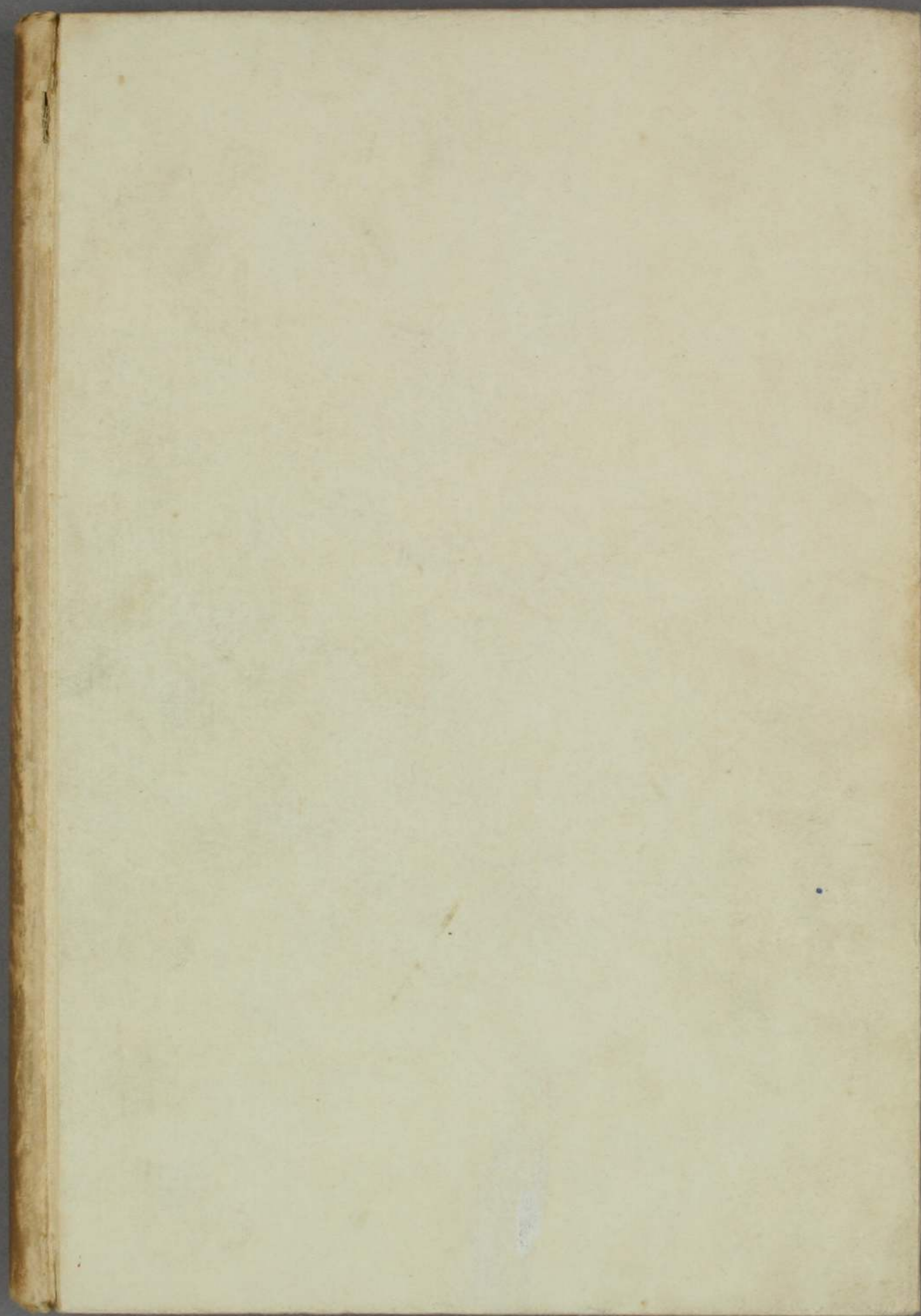


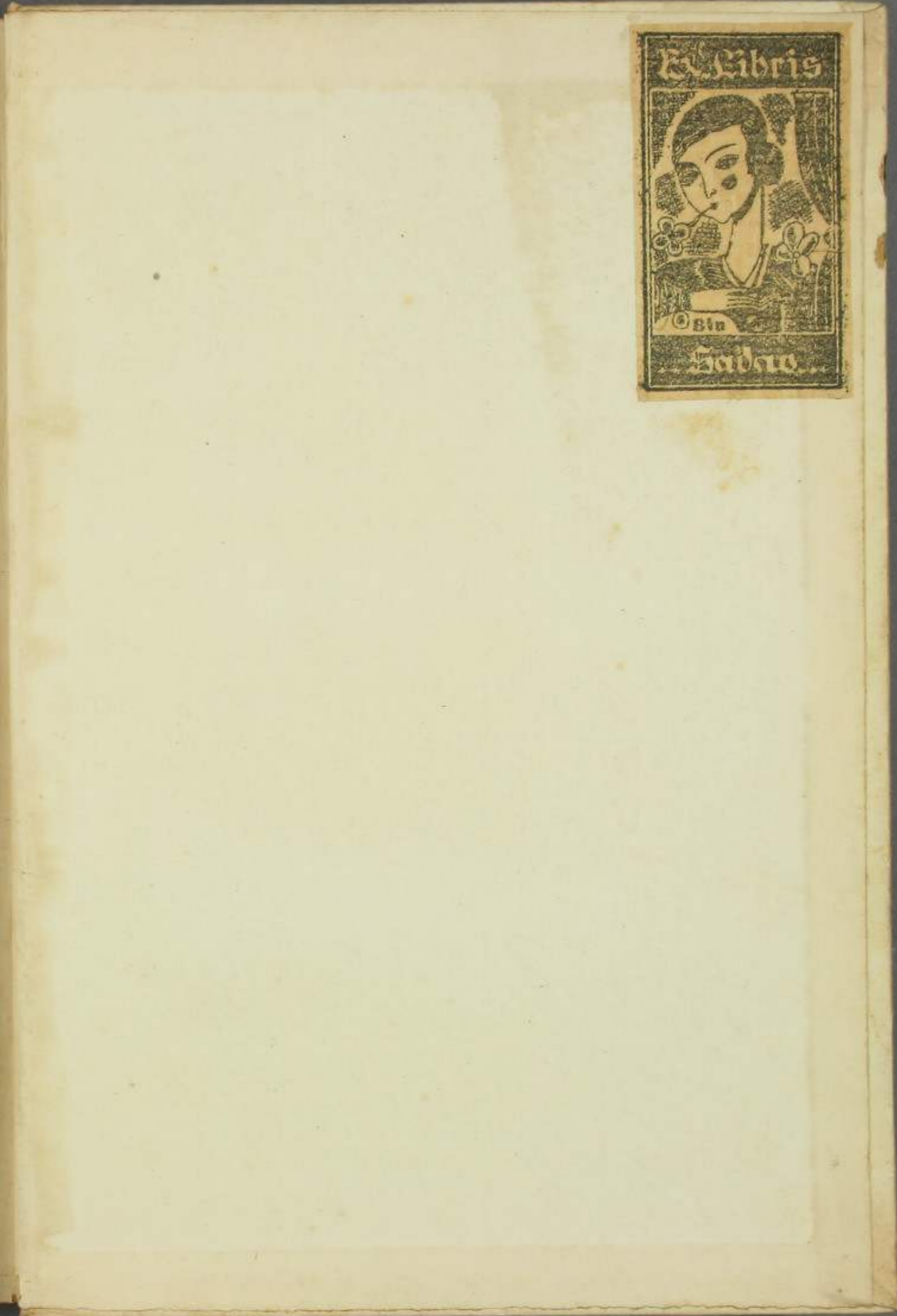
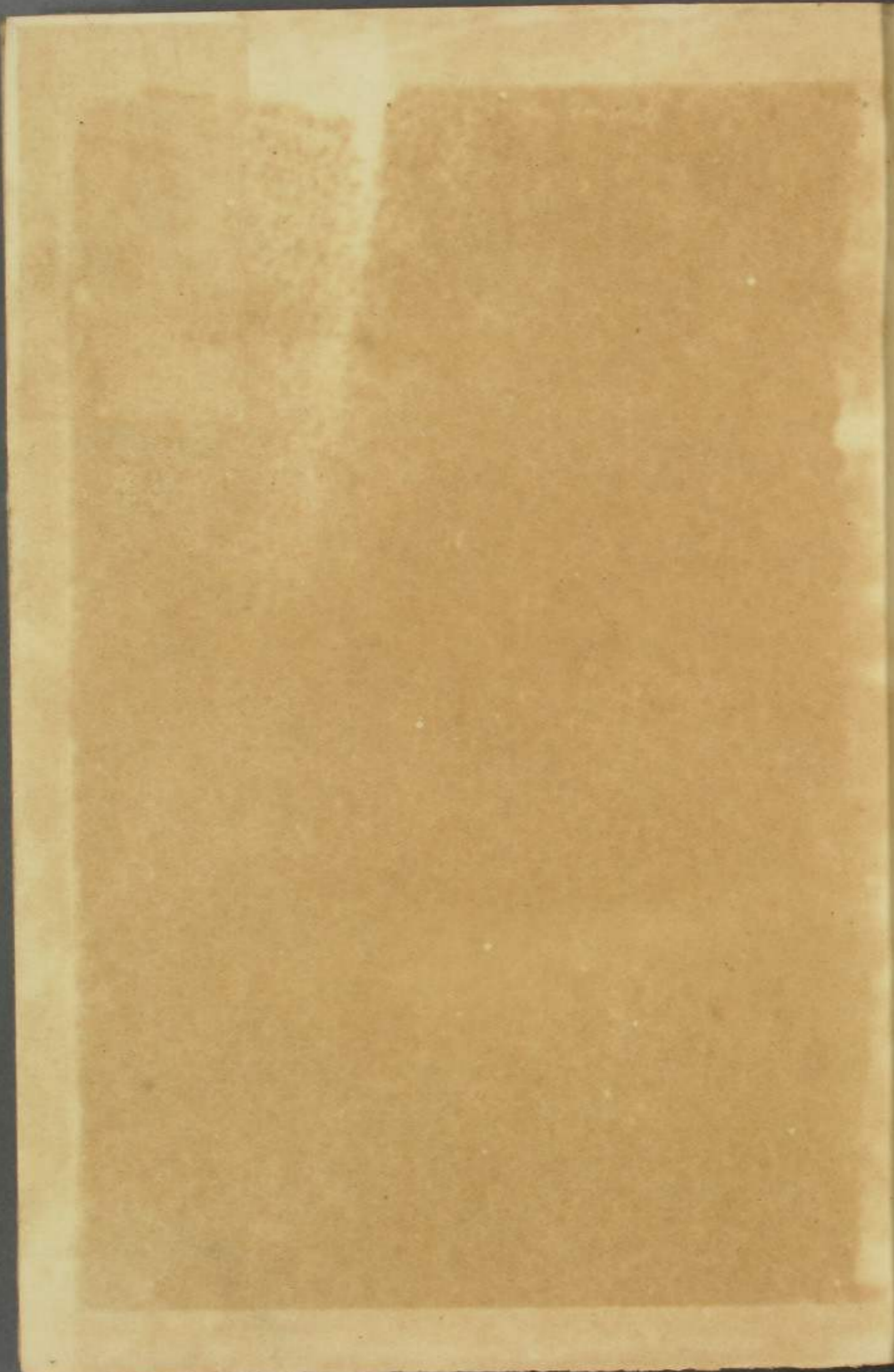


THE UNIVERSITY OF CHICAGO  
LIBRARY



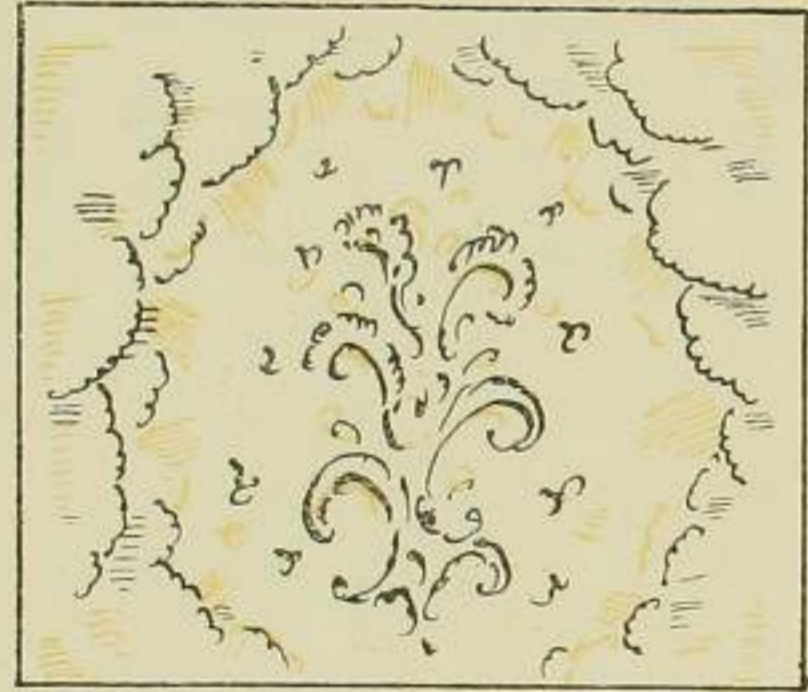








七  
樂  
九



後  
詩  
為  
著  
祝  
山

凡  
閣  
文  
叢

19



山村暮鳥様

諸方から雑誌を送つてくださいますが私は自分の懶慢から滅多に目をとほしたことがありませんでした。ところが苦惱者を頂戴してはからずあなたの「眞實に生きようとするもの」といふのを拜見しておもはず涙を流してしまひました。詩の形式のごときは私にはよく解りませぬ。然しあなたの詩に盛られた純眞な信心持はふかく私に徹底しました。私のやうに實生活に安易なものが涙をながしたとまうしたところで、それは寧ろ滑稽とい



はるべきものかと思ひます。これは他人に申すべきことではなかつたかも知れませんが。然しあなたは私の心持をもまつたくおわらひ捨てもなさるまいと思つて、あなたの御名譽のために些やかながら一つの Homage を呈したいばかりに此の手紙を書きました。

あなたのお仕事の上に祝福をいのり上げます。

大正八年二月二日

東京にて

有島武郎

## 目次

ふるさと.....	一
自分は光をにぎつてゐる.....	四
鐵瓶は蚯蚓のやうにうたつてゐる.....	六
春.....	九
春.....	二四
ひるめしどき.....	二六
じやがいも.....	二八
此の道のつきたところで.....	一九
詩人・山村暮鳥氏.....	二二
海邊にて.....	二五
山上にて.....	二七



星……………	二六
聖母子涅槃像……………	七
船にて……………	一〇
萬物節……………	四〇
大地の子……………	四三
蟻をみて……………	四七
鴉にかたる……………	六〇
あらしを讃える……………	六三
一本の木がある……………	六八
木……………	七一
朝……………	八三
農夫……………	八七
かほ……………	九〇
地を嗣ぐもの……………	九三

おくりもの……………	九五
ある時……………	九七
ある時……………	九八
ある時……………	九九
ある時……………	一〇一
ある時……………	一〇二
ある時……………	一〇三
ある時……………	一〇四
ある時……………	一〇五
ある時……………	一〇六
ある時……………	一〇七
ある時……………	一〇八
ある時……………	一〇九
ある時……………	一一〇
ある時……………	一一一



ある時	115
断章	117
断章	118
断章	119
断章	120
断章	121
断章	122
断章	123
断章	124
断章	125
断章	126
断章	127
断章	128
断章	129

断章	131
断章	132
断章	133
断章	134
断章	135
断章	136
断章	137
断章	138
断章	139
断章	140
断章	141
断章	142
断章	143
断章	144
断章	145
断章	146
断章	147
断章	148
断章	149
断章	150
断章	151
断章	152
断章	153
断章	154
断章	155
断章	156
断章	157
断章	158
断章	159
断章	160
断章	161
断章	162
断章	163
断章	164
断章	165
断章	166
断章	167
断章	168
断章	169
断章	170
断章	171
断章	172
断章	173
断章	174
断章	175
断章	176
断章	177
断章	178
断章	179
断章	180
断章	181
断章	182
断章	183
断章	184
断章	185
断章	186
断章	187
断章	188
断章	189
断章	190
断章	191
断章	192
断章	193
断章	194
断章	195
断章	196
断章	197
断章	198
断章	199
断章	200



梢の巢にて



わが肉の肉なる

妻 ふじ子にこの詩集を贈る

ふるさと

枯木が四五本たつてゐるそのあひだから

おゝ静かなうつくしい湖がみえる

湖をとりまいてゐる山山や木木はひるなかでも黒い

まるでこしらへたものゝやうにみえる

あまりにさびしい

ほそぼそと山腹の逕はきえさうで

人つ子獨りあるいてはゐない

けれどそこにも一けんの寒さうな小舎があり

屋根のけむだしから

糸のやうなひとすぢのけむりが

あをぞらたかくたちちのぼつてゐる



なんといふ記憶だらう

これがあの大きな山のふとこで

あかんぼの腫のやうにすんでゐる湖だ

冬も深く

氷切りがはじまると

自分達の父もよくそこへでかけた

そして熊のやうにひとびとにまじつて働いた

父はいまでも鐵のやうに強い

おとうとよ

峠の茶店のばあさんはどうしてゐる

谿間でないてゐる閑古鳥を

わが子か孫かでもあるやうに可愛がつて

自慢してゐたばあさん

あのばあさん

まだ生きてゐるか



自分は光をにぎつてゐる

自分は光をにぎつてゐる  
いまもいまとてにぎつてゐる  
而もをりをりは考へる  
此の掌てのひらをあけてみたら  
からつぽではあるまいか  
からつぽであつたらどうしよう  
けれど自分はにぎつてゐる  
いよいよしつかり握るのだ  
あんな烈あらししい暴風の中で  
掴んだひかりだ  
はなすものか

どんなことがあつても  
おゝ石になれ、拳  
此の生きのくるしみ  
くるしければくるしいほど  
自分は光をにぎりしめる



鐵瓶は蚯蚓のやうにうたつてゐる

うすぐらいでんとうがひとつ  
せまいけれどがらんとしたへやだ  
ほんやりとめざめてゐるわたしに  
なんといふしづかさ

そとではかぜがあばれてゐる  
いたづらなこどものやうに  
あめをつよくふきかけたり  
とをがたがたとたゝいたり  
けれどわたしのへやのしづかさは  
まるでふかいうみそのやうだ

きうすもちやわんも  
ごろごろそこらにころがつたなりで  
みんなぐつすりねむつてゐる

ぐつたりとつかれて  
あほむけにひつくりかへつたわたしのそばで  
ほそほそと  
ひばちのうへのてつびんが  
なにやらうたをうたひはじめた

ゆびをくむにはくんだけれど  
さてどんなことをいのつたものか

かぜはいよいよはげしく

鐵瓶は蚯蚓のやうにうたつてゐる



おそろしいげだものでもほえるやうだ  
とはいへわたしのへやばかりは  
ひっそりと

てつびんがみよづのやうにうたつてゐる

どうぞこのまゝねかしてください

またあたらしいたいやうのでるまで

春

はるがきた

はるがきた

いまひるちかく

いとのやうなでんせんにとまつてつばめがには  
めづらしさうにあたりを

きよろきよるみまはししながら

なにかぺちやくちやさえづつてゐる

いちのはつばめは

あをぞらをぎり

むぎのはたけをひくゝかすめて



もうみえなくなつた

あゝいゝ

いきいきとしたねぎやそらまめ

なたねのはな

ぞつくりとほのかでかつたむぎぐさ

みんなこゝではうつくしく

なんでもこゝでは

しみじみとしんじつをこめ

みよいちめんにもえたつばかりだ

はるがきた

はるがきた

けふのやうなよいてんきでは

のびのびとすべてが

かうふくでそしてかなしい……

かはむかふのをかを見ると

としよつたのうふがつかれたらしくはたらいてゐる

なにかたねでもまかうとするのか

なんといふをもさうなくわだ

しつとりとしたあまじめりのはたけのつちは

ほりかへされてくろぐると

むくむくともりあがり

こえふとり

ちいさなちいさなまるでごみのやうなはむし

むすうのそれらまでがせはしくうごき

とろりとしたこのあぶらのやうなひかりのなかでいきでゐる



あちらのまぢのしづかさはどうた

やねとやねとのかさなり

そのうへのどんよりしたそら

たいやうはどこにあるのか

すべてがいろいろつで

ねむさうで

よろよろといまにもとろけさうにみえる

どこかであかんほがないてゐる

うまれたばかりのやうで

とほいとほいちべたのなかからでもくるやうなこゑだ

それがあをあをとしたはたけをこえ

まつかぜやなみのおとにまじつてきこへる

さびしいほどしづかなひだ

さかんなかげらふだ

おゝこのからだのふかいひどよ

そのかすかないたみ

そしてそのひどからのびだすあたらしいのぞみのめよ



春

なごさで網を引いてゐる  
みろ、のんきさうにひいてゐるではないか  
をとこたちがひいてゐる  
をんなたちもひいてゐる  
こどもらもそれにまぢつて  
みんなでひいてゐる  
ほんやりとねむさうだな  
網はみえない  
おい、網を引いてゐるのかい  
海を  
つなで

ながいつなで  
ひきよせてゐるやうにみえるな  
ゆめのなかで、おい  
蒼空のやうな海を  
ひきよせてゐるやうにみえるな



ひるめしどき

麥の穂のかけにかくれた  
遠方の市街で  
工場の汽笛かたるさうに鳴りだしたので  
しよひかごを肩にひつ掛け  
ちんとてばなをかみ  
そしてあるきだしたおばあさん  
おぢいさんもそれを見て  
大きな鍬をひつかついだ  
おぢいさんは鐵のやうにまだがつしりしてゐるが  
おばあさんの腰はもう曲りはじめた  
ふたりはあるきながら

畠の青々とした野菜ものや

さはさはと波立つ麥などをゆびさして  
なにかしやべつてゐるやうだ  
どこにゐたのか

それを遠くでみつけたこどもがこちらをむいて驅けだした  
畔道でばつたりころんで

みえなくなつたが

すぐもつくりとはねおきて

まへよりはやく

まるで隼の

翼でももつてゐるやうにはしつた

おゝそして自分も

自分をまつてゐる食卓へ

いま晝飯にいそいでゐるのだ



じやがいも

夏の日はんかん照り  
ひでり畑では  
百姓をんなにほられて  
じやがいもがごろごろところげだす  
かたはらの立木の幹に  
しばりつけられて  
こどもはぎあぎあ泣いてゐる  
百姓をんなのせはしさよ  
その歎さきにごろごろところげだす  
ひでり畑のじやがいも  
眞實をこめたじやがいも

此の道のつきたところで

寂しいほそみち  
畑中のみち  
すべての道に畑中のさびしさ  
いのちのやうな一本道  
そよかぜに  
波立ちゆれる麥畑の  
此の道をゆけ  
此の道のつきたところで考へろ  
やがて都會の空をきり  
まつくろなかぜといつしよに  
つばめのやうにとびかけるにしても



此の道をしばらくしのぐ

詩人・山村暮鳥氏

自分はいまびやうきで  
その上ひどいびんぼうで  
やみつかれ  
やせをとろへて  
毎日豚のやうにごろごろと  
豚小屋のやうな狭い汚いところで  
妻や子どもらと一しよに  
ねたりおきたり  
のんだり  
食つたり  
そしてやうやく生きながらへてゐるのだ



ほんとに豚だ

みよ、かうして家族は

みんな寢床にもぐりこんでゐる

一日のことにつかれてぐつつすと

大きな口をあけ

だらりと長い涎をながして

なんにもしらずに寝てゐる妻

その胸のあたりに

これもうまれたばかりの豚の仔のあかんぼは

乳房をさがして

ひいひと泣く

それから風つびきの鼻汁を

頬つぺた一めんになすりつけ

ふんぞりかへり

お尻をぐるりとまるだしの

もひとりの女の子

おゝ、かあいい

よるはくさつたくだものゝやうだが

さすがにこのしづかさ

自分はいま

戸棚から子どもの蜜柑を一つ盗みだしてきて

あかんぼのおしめを炬燵で干しながら

むさぼるやうにそれを頬張り

皮だけのこして

口髭の汁をぬぐつた

ふかいよるだ

出埃及記もやうやく終はつた

さあこれから世界のひとびとのために祈りをさゝげて



ながながと自分も痩せほそつた骨を伸ばさう

海邊にて

美と健康との

偉大な海よ

自分はこの人間の嚴肅さにおいて祈る

まことに海は生きてゐる

山をなす浪々のうねり

紫紺色なる海面うねり

鷗どり

一羽二羽三羽五羽十羽二十羽

けむりはくふね

帆をあげたふね

自分は砂丘にねころがつてゐるのだ



海豚のやうにねころがつてゐるのだ  
まつばだかで  
そして海に酔つてゐる  
海に酔つばらつてゐるんだ

山上にて

自分は山上の湖がすきだ  
自分はそのみなぞこの青空がすきだ  
その青空には白銀しろがねの月がでてゐる  
ひるひなか  
その月をめぐつて  
魚が二三尾およいでゐる  
ちやうど自分達のやうだ  
おゝ人間のさびしさは深い



星

わたしは天をながめてゐた  
なつのよるの  
海のやうな天を

陰影の濃い

日中のひどいあつさはどこへやら  
よるの涼しさにひたつてゐると  
まるで青い魚のやうだ  
かきねのそとでは  
ひよろりと高い蜀黍が四五本  
水のやうなそよかせに

廣葉をばさばささせてゐる

さかりのついでる豚が小舎からぬけて  
ぶうぶうろつきまはつてゐる  
きまぐれな蟋蟀が一びき鳴いてゐる  
もう秋が  
すぐそこまできてゐた

こどもをねかしつけてゐた妻が

こどもがねついたので  
楚音を盗むやうにそこへでてきた  
すつかり晴れましたね  
わたしはだまつてゐた  
なんて綺麗なんでせうね  
いつみてもお屏様は



わたしはそれでもだまつてゐた  
わたしはそれをうるさいとさへおもつた  
すつきりと澄透つた心を  
掻きみだされだくなかつた  
わたしは天をながめてゐた

妻は心配さうに低く

わたしの顔をのぞきこんで言つた  
どうかなすつて

その聲はしめつてゐた

すこしふるへてゐるやうだつた

けれどしんみりと美しかつた

わたしははつとした

そして跳返されたやうに口を切つた

まあ見な

永遠の寂しさだ

たゞそれだけ

それぎりわたしはなんにもいはず

妻もまたなんにもいはず

あたりはしいんと

天では星がきらきらしてゐた

ふたりはそれをながめてゐた

星はもう

どれもこれも

みな幸福さうであつた

みな幸福にみたされてきらきらしてゐた

おほきいほし



ちひさなほし

一つぼろりとひかつてゐるほし

たくさん塊つてゐるほし

わたしはうれしくつてうれしくつて

なみだが頬つぺたを流れた

妻をみると

妻も臉をぬらしてゐた

わたしはたうとうたまらなくなつて

びつくりしてゐる妻をぎゅつと抱きすくめた

だきすくめられて

妻は深い溜息をもらした

わたしはそれをはつきりと聴きとつた

わたしは言つた

これ、こんなに手が冷くなつた

妻はそれにこたへるでもなく

だがさゝやくやうに

もうよほど遅いのでせう

廻の中のこどもがごろりと寝がへりを打つたやうだ

星が一つすうつと尾を曳いてとんだ

こんどは妻が言つた

ほんとにねるにはをしいやうですね

ほそほそと泌みこむやうな

純らかなその聲

わたしはほろりとそして消えてしまひたいやうな氣持で

而もきつぱりと

首でも縊るならこんなばんだ

けれど生きるといふことは



それ以上どんなにすばらしいことだか

星は一つ一つ

千萬無数

まるで黄金の穀粒でもふりまいたやうだ

ばらばらとこぼれおちさうだ

それが空一めん

そしてきらきらとひかつてゐた

わたしたちはねるのもすつかりわすれてしまつて

冴えざえした目で

しみじみ天をながめてゐた

よるのふけるにしたがつて

星はいよいよ

強くきらきら光りだした

もう草も木もひっそりした

さつきの豚もきりぎりすもどこへかゐなくなつて

めざめてゐるのは星ばかりだ

それをわたしたちはながめてゐた

手をのばしたら指尖にでも吸ひつきさうにみえる空、そして星

おきたやうだよ

さうですね

わたしたちはこどもの泣き聲におどろかさされて

またべつべつの二人になつた

もうねようか

え、

妻はいそいで嬶にはいつた

そして中から



おさきへといつた

それをきくとなんとなく、たゞなんとなく

どうしてもたちあがらないではゐられなかつた

わたしはたちあがつた

雨戸をびしびししめながらも

わたしは天をながめてゐた

それから寢床に這ひこんで

ごろりと横になるにはなつたが

わたしはまだ天をながめてゐた

もうねたかい

返辭がない

わたしはめをとぢた

天の星はひときはきらきらとひかりはじめた

聖母子涅槃像

ごろりと家畜のやうにころがつて

むねもあらはに

つきだされた乳房

それにすひついてゐるあかんぼ

あつあつい晝日中

静穩なしづかな畳の上

そしてこゝにも

蚤がをり

蠅がをり

けれどいゝこゑの蟲がをり

窓ぎはにゆれてゐるのは



矮まじくの規那鐵葡萄酒の

空巖にさゝれてさいてゐる石竹の花である

からりとあけはなれた座敷

蒼空のやうなさはやかさ

ぐつたりと寝ころんでゐる母とその子のまうへをはしり

つゝとはしり

つゝと座敷をつきぬけてゆく

一匹の麥稈とんぼ

あつゝあつゝといつてゐるまに

もういつか秋ぐちである

船 に て

暗礁のある

こゝは岬のほとりだ

うみは深い嚴肅にひえびえと

たちあがる荒い波波

その波波

黒黒と渦まく力

大きな帆布のやうに自分はそのぞみを孕んでゐる

そして船は自分達をみんなのつけてはしつてゐる

みよ、かるがると一枚の木の葉のやうにはしつてゐる

此の船はどこへゆくのか

そんなことをしつてゐるものはひとりもない



萬物節

大地はいふ

「わしは拒まない

わしには

拒むといふことができないのだ

どんなものでも

わしはうける

どんなきたないものでも

わしは拒まない

拒まないばかりか

そのすべてに

あたらしいのちと

わかわかしさと

自由と力と

美しさをあたへてやるのだ」

穀物はいふ

「わたしらは穀倉のすみつこで

みんな干涸らびて

みんなふるえてゐました

ある日、農夫がきて

わたしらを重さうにかつきだしました

そして袋から

わたしらをつかみだして

眩しい日光にさらしました

雲雀でもなきさうな日でした



農夫は駈けだすやうに  
はたけにでて

雨上りのしつとりと濕つた土に

わたしらを播きつけました

やがてわたしらは

小さな芽をだしました

それから葉つばをだしました

葉つばがでると

はながさき

はながさくと

實がなり

一粒が百粒千粒になつたので

こんなに大きな穂首を垂れてゐるのです」

## 大地の子

大地の聲にはどつしりとした重みがある

どつしりとおごそかである

それにはまた

深い深いやさしさがこもつてゐる

その聲がわたしに言ふ

「おまへは何をつぶやいてゐるのだ

何をぶつぶつぶやいて

この俺を耻しめるのだ

おまへは俺の子ではないか

俺はすべてをおまへに與へた

美しいこの世界において



生も自由もわかわかしさも

すべておまへはあたへられて

すべてをおまへはうしなつてしまつた

それらをみな

いやはての一滴ものこさず

まつたく蠟の油のやうに

そしてむなしくしてしまつたからといつて

それでおまへはつぶやくのか

あきらめるがいゝ

いまはもう死にまたれてゐるお前だ

お前にはそれがわかるか

だが死がなんだ

おそれることはない

おまへは俺の子どもだ

おまへはほんとに馬鹿な

馬鹿だからかあいゝ奴だ

おまへは生みの母をおぼえてゐるか

その母のふところをおもひだすやうなことはないか

もうなかないでゝゝ

泣かないでゝゝ

俺は怒つてゐやしない

俺はおまへの大きな母だ

おまへたちのながすなみだで

俺はいつも濡れてゐる

いつでもゝゝ

かへつておいで

おまへは俺とともにあるので幸福なんだ

あゝ生きの憐みにつかれはてゝ



まるで枯木のやうに瘦せさらぼひたおまへに

此處にとこしへの休息がある

けれどおまへは

おまへは俺の勇敢な子どもだ

刀をれて矢がつきて

野晒しになつてもその眼をとぢなかつたつはものゝやうに

おまへもそこで戦つておいで

それでこそ俺の子どもだ」

蟻をみて

(赤銅のやうな秋の日のことは

すべて眞實をこめ

すべてゆめで

そしてわたしをひきつける)

けふもけふとて

わたしはいつものやうに

海のみえる

その丘つゞきの

松林の中をあるいてゐた

まあなんといふ



たくさんの蟻だらう

わたしの足はびたりととまつた

地膚もみえないほど

密集した蟻のかたまり

まつくろなそのかたまり

それが

わたしのまへをよこぎつて

動いてゆくのだ

それがどこへゆくのか

わたしはそれについてあるきだした

そこからすこしゆくと

一本の木かげに

孔があつた

孔は砂崩れの崖の上にあつた

蟻の群集はぞろぞろと

せはしさうにその孔に這いつた

はいつたかとみると

こんどはその一びき一びきが

白い幼蟲をくはへては

おゝ千萬無数の蟻

それがぞろぞろとはひだしてきた

その口にくはへた幼蟲こそ

わたしがこどもの頃

穀物の俵だとおもつてゐたそれだ

一びきが一つづつ



その俵をくちにくはへて

いそいでまたも

いましがたきたほうへとひきかへした  
ぞろぞろと

みよそのすばらしい行列を

それをみつけて

それらよりずつと大きい一びきが

そのすがたを

消したとみるよりはやかつた

大きな蟻の群集の

あはたゞしくそこにあらはれたのは

そしてあらあらしく

小さな蟻に飛びかゝつたのは

小さな蟻はにげだした

逃げながらも

よくふせいだ

よくたゝかつた

たちまち

あたりは一めん

みるも惨らしい戦場となつた

わたしはみた

縦横とかけまはつて

大きな蟻があらゆる狂暴をはたらくのを  
けれどもう

小さな蟻の大部分は

その幼蟲をしつかりくはへて



すでに遠く

逃げのびてゐた

わたしはみた

たくさんの嚙殺された小さな蟻を

それらの死骸がひきづられて

大きな蟻にもちさられるのを

逃げおくれた小さな蟻はことごとく

そこにたほれた

稀には敵の目にもとまらないで

つゞかなく

味方のあとを追ふ

幸運のものもあつたが

犬方はみるかげもなくそこにたほれた

あるものは

幼蟲をうばひとられて

怒り狂ひ

敵に嚙みつき

うちたほされ

あるものは

にげまどひ

小さな木のでつぺんまで

逐ひつめられて

つき落とされた

山のやうなところを匍ひのぼり



谿のやうなところをこえて

まつくろな一塊の

蟻の群集は

とほくとほく

戦場より二三十間もへだたつた

松の古木のその根もとの

新らしい巢へとむかつた

それは勇しい群集であつた

そのながながしい行列

その行列は歩調を亂してゐなかつた

一ばんあとから

いそいでつゞいた

二三びき

その二三びきはひどく負傷でもしてゐるのか

どれも跛<sup>び</sup>をひいてゐた

それでもくちの幼蟲は離さなかつた

もうそれぎりかとみると

また一びき

それは二本とも脚がなかつた

ごろごろところがり

ころがりながら蹙つてゐた

いちはやく

新らしい巢へぶじについたものは

後からの仲間を氣づかつて

でてきた

そして遭ふものごとに



髭をふつては挨拶し

たがひによろこびをかはすやうに見えた

疲れたものに手傳だつたり

路ばたで

たほれてゐるものをみつけては

それらをはこんだり

そして一びき残らず

すつかりその巢へはいつてしまふと

ときどき

敵は来ないかと

一びき二ひきがそつと

孔の口まで

でてみるばかり

もうその心懸りもないので

ひつそりと静穩しづかになつた

ふたゝび戰場へ来てみると

そこにはまだ

獐猛な蟻めがうろうろと

小さな蟻をさがしあるいてゐた

孔孔のいり口に近く

なかをのぞいてはみるが

その中にはいつてゆくほどの強者はない

孔には

まだ生きのこつて

小さな蟻があるのだ

残壘を死守してゐるのだ



けれどそれも

ほんのしばらく

大きな蟻がゆうゆうと

引き上げてかへると

こゝもまたうつくしい霧のやうな松風の中で

蒼空もねむつてゐる

爽かな松林であつた

(赤銅のやうな秋の日のことは

すべて眞實をこめ

すべてゆめで

そしてわたしをひきつける)

わたしは

砲烟彈雨の間を

くどりむぐつてきたものだが

なんにも知らなかつた

わたしは

けふはじめて

蟻のはげしい戦鬪をみて

手に汗をにぎつた



鴉にかたる

からりと晴れた朝だ  
からりと大きく  
そしてたかく  
これから酷しい冬にはいる  
十月ごろの朝の蒼空ほど  
きつぱりと氣持のいゝものはない  
槍の穂尖でもつきつけられたやうだ  
おう、おはやう  
君達はいつもはやいね  
鴉君  
僕はいまおきたばかりだ

まだ顔も洗はないんだ  
昨夜はどうだつたい  
あのすばらしい暴風雨は  
あの猛烈さは  
まつたく何ともいへないね  
君の巢はなんともなかつたかい  
僕はこども達がねてゐるので  
それをめざますまいと氣が氣ではなかつた  
まるで戦争だね  
雨戸一重をさかひにして  
僕はうちから  
あらしはそとから  
あらしが吼えくるつて大波のやうにのしかゝるのを  
野獸のやうな力で僕が



ぐつとさゝへる

押しかへす

またのしかかると

また押しのける

それこそ自分ながら勇敢だつたよ

僕はもう

僕の力をうたがはない

だが暴風雨のあのすばらしさは

何がなんでもほめたたえずにはゐられない

あらしを讃える

——山田耕作氏におくる——

あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

どこから逃げてきたもんだかさ

蝙蝠傘が一つ

さゝげ畑で踊つてゐるげな

あらしだ

あらしだ



あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

蝙蝠傘のをどりはおもしろかんべえ

それはさうでんすとも

だが見てるはうでも一生懸命ですぞい

あらしだ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

まるで氣狂<sup>きちが</sup>ひでんす

ぐるぐるぐるぐる

めんどまわりのやうな眞似をしたかと思ふと

あらしだ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

びつたりとまつてなし

何かちよいと首をひねつて考へてゐたつけが

びゆうと高く

それこそほんとに馬にでも蹴飛ばされたやうに飛び上つてなし

それつきりみえましねえ

あらしだ

あらしだ



あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

ぐつすりねてゐたあかんぼまで

びつくりしたほどなんです

ぎあぎあ泣きだしたのも無理はあんめえ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

あれつきりみえなかつた蝙蝠傘の奴め

どこをどううついてゐたもんだやら見てくらすせえ  
ぼろぼろになつて

あらしだ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

あらしだ

たいへんなあらしだ

いまみれば宙にぶらりと

まあ・かあいさうに

首縊りをしてぶらさがつてゐやすだ

あらしだ

あらしだ



一本の木がある

一本の木がある

曲りくねつた木だ

くるしみ

くるしみ

くるしみぬいてきた木は

いまはどんな暴風にも怖れず

日光をほかほかとあびて

そして静穩に立つてゐる

こゝは寂しいはらつば

もえたちさうな枯草

冬だ

すつとはなれたところに二三人のひとかげが見へる

みんな老嫗らしい

みんな銘々にをもさうな枯木の枝をせおつてゐる

おくのおくの

大きなふかい雑木林の中から

そこへでてきたらしい

ほんとに静かだ

鳥も鳴いてゐない

日光をほかほかとあびて

わたしのまへには葉っぱ一つ葉つけてゐない

たゞ一本の

頑丈な木がたつてゐるばかりだ



それだけである

そして木は語つてゐる

わたしに

言葉にもない

書物にもない

或る一つのことを

たつた一つの眞實をこめたはなしを

しみじみと無言で……

ほんとにほんとに何といふ静かさだらう

木

一本すんなりと立つた木がある

あちらに四五本

こちらに七八本と

塊りあつてゐる木立がある

さうかとおもふとびつしり密集してゐるところもある

ひよろひよろと瘦せて寂しくたつてゐるのや

曲りくねつたのや

むつまじく肩を組んでゐるのや

いきいきと赫いてゐるのや

幸福さうに見えるのや

くるしみくるしんできたやうなのはみな老木だ



どんなことでも知りつくしてゐるやうにみえる老木は  
いかにも静かだ

おちつきがでてきたのだ

木がこの天地の間にあつて

どつしりとおちついてくるやうになると

そこに尊嚴おつじやが自ら加つてくるやうだ

そしてその深い深いところでは

大きななつかしさを見せるやうになる

さうした木をみると

だれでも

いのちといふことを

そして生きてゐることを沁々おもふだらう

老木のぐるりには

稚おい木がある

ひらひらと可愛い葉っぱをうごかしてゐるのは

あかんぼの木だ

その上にそれをかばつて伸ばしてゐる手のやうな梢

雨がふると

びつしよりぬれ

日が照るとひかりを浴び

どんな木でも

木といふ木はみな

何といふこともなくたゞ生長してゐる

山上高くたつてゐるもの

谿間を暗くこめてゐるもの

丘の上のもの

水のほとりのもの

\*



それがために世界はこんなにうつくしいのだ  
ときとするとき

茫々とした大きな野原のなかなどで

章魚が足でものばしたやうに枝をのばして

葉っぱ一つ葉っぱない

冬枯の

あれ錆びた木をみることがある

それにはきつと鳥がとまつてゐる

鴉がぼろりと一羽

啼きもしないでとまつてゐる

さうでなければ

雀がこぼれるほどむらがつて

まるで戦争でもしてゐるやうに

がやがや喋舌つて騒いでゐることもある

それに夕日がかつと射したりして  
いゝ風景だ

どんな木でも

木といふ木はみないゝ

それは木ばかりではないけれど

ことさらに木はいゝ

何といふこともなくたゞ生長してゐるところが

たまらなくいゝ

そして木は

大きな木ほど立派である

いま自分のすんでゐるところに近く森林があるので  
自分はしばしばそこへ行く

\*



そして大きな木木をみる  
腹が立つとそこへゆく  
かなしいとそこへゆく  
うれしいとそこへゆく  
つかれるとそこへゆく  
氣が腐つてくるとそこへゆく  
ゐてもたつてもゐられなくなると  
あはてゝそこへゆく  
そして大きな木木をみる  
大きな木木だ  
その幹はどれもこれもまるで胴體のやうに太い  
それが群像のやうに立つてゐるのだ  
ふりあふぐと  
梢や葉つばのあひだから

小さな蒼空をぼつぼつとみせてゐる  
そんな大きな木ばかり  
日光が射さないので  
その木木のしたかげはしつとりといつでも濕つて  
そこにはいちぢけた草や苔などが  
いちぢらしいほど小さい花を飾つてゐる  
またそこにはさまざまの小鳥がゐて啼いてゐる  
まるで大きな古いむかしながらの  
伽藍の中にもはいつたやうに  
そこはしづかだ  
しいんとしてゐる  
それでゐてその木木の間にあると  
大きな重いどつしりとした力で  
くつとおさへつけられるやうだ



身動きもならないやうに  
そしてそこでは咳拂ひ一つするのもゆるされない  
自分はふるへるほど冷くなつては  
そこからでてくるのだ  
けれどそこからできて  
ばつと日光に觸れるともうどんなときでも  
自分は穏かな海のやうになつてゐる  
とつぷりと満たされた自分だ

諸々の木であるが

ほとんど落葉樹はない

檜がある

椎がある

黒松がある

縦や横がある

山毛櫸がある

それらが天にそより立つてゐるのだ

それらがたがひに空間を

それぞれすき勝手な姿勢をとつて

大きな蛇のやうにうねりくねつてゐるのだ

そのうつくしさは

たゞのうつくしさではない

静かなその胴體のやうな幹だけみてもぞくぞくするが

木木はなんといつても大暴風の日だ

それはもの凄く

それは勇壯である

天地も裂けよととろきわたる雷をともしひ

双のやうな稲妻をはなち

木



おそろしい雲に乗り

その雲を鞭打ち

銀の鏃の雨をそゝいできたあらし

千萬無数のあれくるふ猛獸

角をふりたて牙を鳴らして

ひしめき蹴散らしのしかゝるあらし

あらしのはゞたき

それをまともに睨んだ木木

びくともせず

大地にふかく足を踏んばり

大手をひろげて立つたその木木

髪の毛をばふりみだし

くみつき

つきのけ

おしもどし

はねかへし

咆哮ほえたいける

木木をみる

木木は千古のつはものである

而も梢の小鳥の巢一つおとしはしない

いま木木は静かである

森林は海底うみそこでももあるやうに静かである

紗なすもののやうなそよかぜに木木は浸され

ふかいふかいちんもくに浸され

そのちんもくのふところの

大きなおほきな力もすべてひたされて静かである

はつきりとさはやかである

木



天心てんしんでないてゐる蟬もきこえる

しんしんと雨のやうだ

このころを知らふつてくる細い霧でしつとりと

木木はきよらかに濡れてゐる

こんな日もある

めづらしいことだが

けふの自分は自分からもう木になつてゐるのだ

朝

菜つ葉をみよ

あさつゆに

びつしよりと濡れてゐる

寂しい菜つ葉を

冬近い

はたけの菜つ葉

ひんやりとふりそよぐ

日の光りだ

わたしたちの生は短い



ほんとに短い

そして苦惱にみちみちたものだが

それはまた

何といふ美しさだらう

太古のことがおもはれる

あゝ寂しい茶つ葉

それを神様もわたしたちのやうに

よろこんで食べてゐたのか

やがて、雪が

ちらちら飛ぶ頃になると

お伽噺がいきいきと

わかゞへつてくるにきまつてゐる

現實世界の神秘的な

一體、眞實といふものは何だ

より大きな創造のために

浮身をやつすわたしたち

それまでだ

さあ、あさつゆを

はねかすのもよからう

踊つておくれ

風がふいたら

ひらひらとしなよく

きらきらと



きらきらと

寂しい菜つ葉よ

だがそこにつるんでゐる蜻蛉を

それで

びつくりさせないやうに

農 夫

なんとなく空は險惡で

そしてくらく

ぼつぼつ雨さへおちはじめた

もう一日も終りであつた

自分はおもひだす

氷山のやうなあの山山を

銅鐵はがねのやうな冬のあの日を

そこではげしく

たつたひとり

たつたひとり

大きな熊手まんのう鋤をふりあげふりあげて



せつせと働らいてゐた

あの獣のやうな農夫を

疾駆してゐる汽車の窓から

自分はちらとそれを見かけた

みぶるひがさつとはしつた

そのときから自分のこぶしは石となり

自分の頭上にはだれにもみえない角が生えた

そのころの自分のくるしみ

そのどんどごから

それでも自分は帽子を脱つた

農夫はなんにもしらないのだ

けれど自分をしみじみと考へさせた

わきめもふらず

天も仰がず

荒れはてた田圃の中で

刈株の土をおこしてゐた

たつたひとりの

あの農夫

ひとりであつたあの嚴肅さ

ぼつぼつ雨さへおちてゐる記憶の上につゝ立つた

自分は強い農夫をみる

自分は強いそして獣のやうな人間を

しまもかく



か ほ

よるもひるもたえず  
みえないあらがねの鑿をつかんで  
こつこつと専念に一つの顔を彫刻してゐるわたしだ  
うつくしくあれ  
うつくしくあれと  
けれどほりだされる顔をみれば  
日一日とみにくくなる  
額にふとく  
蟀谷<sup>こらみ</sup>まで  
よこにひかれた悪魔の爪  
ことさらに深い一すぢ

そのしたには

おそろしいおとしあなのやうに落窪んだ眼と眼  
げつそりとやせこけ

懸崖<sup>がけ</sup>のやうにそげた頬つべた  
くらいか

ひらいたら火でも吐くか

きむづかしく

憂鬱にひきむすんだ無言の唇

蛆蟲でも匍ひだしさうな鼻の孔

あゝどうしてかうもみにくくなるのか

ひとのしらない嘆息が洩れる

一生一つのこんな彫刻をするわたしだ

だがいまさらそれがなんとならう

またどうしてこれがすてられやう



これこそ自分の顔である

此の顔の

此の落窪んだ

此のおとしあなのやうな眼のおくにあつても

なほ眞實は汚れず

その二つの星はいまもいきいきと燦いてゐる

こつこつと専念に

みえないくるしみの鑿をつかんで

一生一つのこんな彫刻をするわたしだ

### 地を嗣ぐもの

みちばたであそんでゐた

ひとりのこども

どろを捏ねてゐた

そのこども

そのどろで

山をこしらへ

そこに木を植ゑ

家をたて

馬をつくり

そのつぎに人間をふたりこしらへ

その人間に言葉をかけて



ちちよ

ははよ

これでもうおしまひだから

一ばん強く

そして大きく

こんどは自分を創ります

おゝあのごども

おくりもの

どんなところへでも

人間の愛のあるところには来るやうに

まづ子どもたちに

それからわたしたちにも

まっすぐにクリスマスはきた

小さな羽子板と

かあいゝはねが二つ

クリスマスがわたしたちに

まづしいわたしたちに

それを子どもたちめいめいの枕もとにおかせた

わたしたちはめざめたときの



子どもたちの顔をおもひうかべた  
そして世界きつての幸福者であつた  
しんじつ

そのときのわたしたちは  
このめでサンタクロオスをみた

あ  
る  
時

藪の中で  
拮楯が

かたりかたりと

ゆられてゐた

鴉よ

鴉よ

なんで

わたしが頬つべたを

ぬらしてゐたか

しつてるか

大風の日だつた



あ  
る  
時

あんまり風がひどいので  
障子の孔からのぞいてゐた  
大通りでは  
びつこをひいた瘦馬が  
山のやうな重い荷馬車を引いてゐた  
そこへひよつこり  
妻と子どもがにこにここと  
吹き捲くられてかへつてきた

あ  
る  
時

ひさしぶりで  
雨がやみ  
あさひがさして  
木木の枝では  
びかびか露がひかつてゐると  
ちひさい頃  
わたしは學校の本でよんだ  
からりとはれた  
此の碧空  
あちらでもこちらでも  
あれ、あれ



棺の果にて

日向にでて

何處でも風を潰してゐる

100

あ  
る  
時

わたしはうやうやしく

いつものやうに感謝をさしげて

すうぶの椀をとりあげました

みると

その中におちて

蠅が一びき死んでゐるではありませんか

おゝ神様

じやうだんではありません

あ  
る  
時

101



あ  
る  
時

蔦が大きな輪をかいてみせた

なんのことだか

輪をかいてみせた

おもひあまつて空を見てゐたら

蔦が大きな輪をかいてみせた

あ  
る  
時

ぎゆう、ぱりぱり

おやいゝ音だな

裏の畑で黄蜀黍たうちもこしをもぎとる音だ

火のつくやうな髪をしたとなりのおかみさんが

こしまぎ一つで

なにか

ぶつぶついひながら、ぎゆう



あ  
る  
時

ないてゐるのは

きりぎりす

火のやうなきりぎりす

草の葉つばのふかいところで

きりぎりすをみながら

この炎天に

戀もするだろ

きりぎりす

あ  
る  
時

一ひきの

麦藁とんぼをおつかけてきて

ちらとみつけたたうもろこし

とんぼつり

とんぼつり

おまへのかほは耳つ朶まで

そめたやうにあかいな

たうもろこしにほれたんだろ



あ　る　時

そらが

屋根の上で

まあ、こんなにたかくなつた

そしてみがきでもかけられたやうになつた

じいつとみてゐると

そのそらに

畑や市街がうつゝてゐるやうだ

草の葉のそよいでゐるのもみえるやうだ

自分の顔もどこかにうつゝてゐやしないか

おうい、雲よ

自分はもうなんにもいらない

あ　る　時

おまへはびんぼうだな

さうだ

おまへは金持になりたくないか

なりたくない

おまへはつまらない人間だな

さうだ

どうだ、王様にしてやらうか

まあお断りしよう

なんといつても

わたしの尻尾がつかめないので

悪魔はかへつてしまひました



あ  
る  
時

じめじめと

雨がふるふる

雨がふる

蜘蛛がかかるわざしてござる

あめがふるので

つれづれなので

ひとりかるわざしてござる

宙でかるわざしてござる

秘術つくしてしてござる

あれ

つつつと針金わたり

つるり

ぶらりと

ぶらさがり

あれ、あれ

おもしろい首縊り



あ　　る　　時

こんなに海が荒れてゐるので  
どうして魚がとれるもんか  
魚など釣るところか  
ぶじだつたのがめつけもんだ  
それでも海はかへりがけに  
晩にはこれで一ぱい飲めと  
鰈一枚くれてよこした

あ　　る　　時

友はいま遠い北海道からかへつたばかり  
ながながと旅のつかれにねころんだ畳の上で  
まだ新しい印象をかたりはじめた  
うまれてはじめて乗つた大きな汽船のこと  
それで蒼々した海峽を  
名高い波に揺られながら横断したこと  
異國的な港々の繁華なこと  
薄倅詩人の草深い墓にまうでたこと  
トラピスト修道院の屋根がはるかに光つてゐたこと  
古戦場で珍らしい閑古鳥をきいたこと  
さまざまなことを友は語つた



それから時にと前置をしてしめやかにその言葉を切り

友は一すぢの糸のやうな記憶をたどりはじめた

それはもう黄昏近い頃であつた

と或る田舎の小さな驛で

身なりだけでもそれと知られる貧しい女が

一人の乳呑兒を背にくりつけ

もひとりの子の手をひいて友の列車にあはたしく駆けこんだ

車中はぎつしり一ぱいだつた

その女はよほどつかれてゐるらしく

自分の席をやつとみつけて脊中のこどもを膝におろした

そしてほつといきをついた

友のそばに無理矢理に割込ませられた大きなほうの子ども

それは女の子であつた

汚い着物とみにくい顔面と

段々と列車の動揺するにつれ

その動揺にほだされてくる心の弛みにがつくりと

みんなのやうにいつかその子も首を垂れてしまつた

はじめの間は何やかとその子のことがぞくぞくするほど氣になつたが

次第に身體からだをまつたく投げ出し

その小さな首を友の胸のあたりに凭せかけてなんの不安もなく

すやすやと鼾さへはじめたその無邪氣さ

友にはそれが可愛ゆくなつてきた

可愛ゆくて可愛ゆくて何ともたまらなくなつてきた

しみじみと

汽車は用捨なくはしり走つた

そしてばつたり停つた

そこは彼等の下車驛であつた

母にめざまされたその女の子は黒い瞳をばつちりと開いた



友はそれをみた

それに人間のまことの美をみた

みたと言ふより寧ろ解したといふべきだ

子どもは立ちあがり

ちらとふりむいてにつこりと而も寂しく

「おぢさん、さよなら」と後にも前にもたつたひとことこれだけ言つた

友はだまつて挨拶した

かなしさがぐつと咽喉までこみ上げたので言葉の道がなくなつたのだと

こんな話を目にでもみえるやうにしながら

もうその眼瞼をぬらしてゐるのだ

あゝ、たまらない

あゝ、こんなのが消えてうせゆく人間の言葉であるのか

あ　　る　　時

都會の雑音がきこえる

都會の雑音はまるで海のやうだ

そこにわたしたちの小さな巢もある

その巢でしきりにわたしをよんでゐるだらう

とうちやん

とうちやん

雑音にまじるその聲

鴉や雀をみんなねぐらにかへらせて

そして日はとつぷりくれた

とつぷりと日が暮れたのでこどもらはさみしく

どんなにわたしをまつてゐることか



わたしもいそぐ

わたしはすひよせられる

赤い灯よ

海のやうな雑音のかなたで遠く

ぼつちりとついたその灯よ

断章 I

どんなにくるしくつても生きねばならない

よしこの大地を舐めずつてなりと

生きるものは生きる

否、くるしめばくるしむほど

より強くかつりつばに生きる

くるしむものは生きる

くるしむものばかりが生きる



斷章 2

友よ

斷間なくふりかゝるくるしみの中でも

重い大きなくなるしみが

きづつけられた野獸のやうに

おゝ、生きた力をよびおこすのだ

くるしみは大きくあれ

そこからでてくるものこそ立派な仕事だ

斷章 3

おゝ、内なるもの

脈搏つ意志よ

汝

永遠の生よ



斷章 4

おまへは世の中へでもつと世間をみて來なければならぬ  
世の中でおまへのしなければならぬ仕事は澤山ある  
小鳥を森へかへすのだ

斷章 5

愛にもえて  
おそろしい獣になるとき  
光りかどやく  
そして神となる人間



箱の奥にて

斷章 6

人間が悪魔なんだ  
人間が神になるんだ  
——自分のやうに人間はそれを造つた

三三

斷章 7

いのちのあるもの！  
その嚴肅なうつくしさみにくさ

斷章

三三



断章 8

おゝ神様

此の目をあけてください

そしたらあなたが見えるでせう

みえるやうにあけてください

断章 9

神が人間をつくつたか

人間が神をつくつたか

それはどうでもいゝ

神は人間にとつてなくてはならぬものだ

それだからあるんだ



斷章 10

蠅 蠅

さみしいときの善い友だち

斷章 11

世界はまつたく  
われわれのために  
つくられたものではなかつた  
おゝ、豚よ



断章 12

自分のそれで釘付けられる  
その十字架を愛せよ

断章 13

風よ  
風よ

わたしにはお前達が愛せない  
どうしたらいいのか  
それがかなしい  
愛とはなんだ  
生とはなんだ  
それはそれとして  
お前達にも父母があり  
妻や子があり  
そしてくるしみがあったのしみがあ

断章



人間とおなじやうな生活をしてゐるのだと思ふと

自分のやうにお前達がみられてならない

その上、お前達はお前達として

立派に生きてゆく力をもつてゐるのだ

あゝそれでいゝ

いゝのではないか

いたずらに愛されやうとはするな

それでいゝのだ

うめよ

ふえよ

地にみちみてよと

創世の朝、お前達も神様の祝福をうけたのではなかつたか

蒼白く瘦せたしらみよ

断章 14

怒つた顔のうつくしさ！

かれは蛇を帯にしめてゐる



斷章 15

泣け、なげ  
 大聲をはりあげてなげ  
 それだけか  
 もつと泣け  
 なきぬけ  
 ふるだけふれば  
 からりとはれるそらのやうに  
 自分はそこにこにこする顔を見る

斷章 16

風がふくので  
 そよそよと揺れる草です  
 路傍の草はさみしい  
 それをみるわたしもさみしい



斷章 17

草木をわたる秋風と  
 わたりどりの翼の陰影と  
 わたしの溜息  
 そしてもろこしばたけでは  
 もろこしが穂首を低く垂れてゐる  
 その穂首からは  
 黄金色の大粒な日光の  
 なみだのやうなしづくが  
 ぼたりぼたりと地に落ちてゐる  
 ぼたりぼたりと……

斷章 18

竹やぶの椿は火のやうに眞赤だ  
 神よ  
 自分はなんと祈らう  
 この烈風の中で  
 この烈風の中で



斷章 19

おゝ人間

汝、小さいぞ

神に妬まれるやうな仕事は！

斷章 20

畔逕ではつたりであつたよぼよぼのとしよりの

これは涎のやうなたちばなしの

そのわかれの言葉だ

「一日も餘計に生きつさせえよ」



断章 21

一本の樹のそばをとほりすぎただけで  
それをみることによつて

自分は自分を幸福にすることを知つてゐる

\*

人と話をしただけで

自分はその人を愛してゐるといふおもひによつて  
どうして幸福を感じないでゐられようか

\*

實際、すっかり途方にくれてしまつた人でさへ  
あゝ綺麗だなどと思ふやうな  
美しいものが一步毎にいくらでもあります

あかんぼを御覽なさい

朝焼けの空をごらんなさい

伸びゆく一本の草をごらんなさい

あなたがたをみつめ

あなたがたを愛するその目をごらんなさい

(ドストエーフスキイの言葉)



斷章 22

わしは愛されるのはくるしい

わしは愛される資格がないからだ

わしは何かしら

此の天地の間にふさがるやうな大きな愛を感じてゐる

それでもうわしの胸は一ぱいだ

わしを愛するかはりに人を愛してくれ

わしは此の胸の中のを吐きださう吐きださうと

苦しみ喘いでゐるのだ

このうへわしを愛してくれるな

ひとびとよ

しかしわしは愛する

愛さないではゐられないのだ

(ドストエーフスキイの言葉)



斷章 23

打て！

それは自分を強くするばかりだ

眞實に生きようとするもの

妻よ

お前はジアン・フランソワ・ミレーを知つてゐるだらう

それを本で讀んだことがあつたらう

あの畫描きのミレーのことだ

自分達はよく彼のことをはなした

彼がいかにまづしくあつたかをはなしあつては胸を一ぱいにし

自分達の境遇をなぐさめ

凡そ地上に芽ぶたいものは

そして一きは高く蒼天をめがけるものは草木ですら

みんなかうだと

彼によつて自分達の仕事はいまもはげまされるのだが

眞實に生きようとするもの



それでも二人はいくたび熱いなみだをふいたことが  
ほんとに彼のびんぼうは酷かつた  
彼等のことをおもへば

自分達のびんぼうやくるしみなどはなんでもないと言はねばならない

こゝは雪もみぞれもふらない國だ  
どこへいつても

大きな蜜柑がいろづいてぶらぶら枝をたはめてゐる  
こんなところへきて

この南方のあたゝかい海のほとりで

避寒してゐる自分達

避寒してゐるなどときいたら

なんにもしらないひとびとはなんといふだらう

なんともいはずはおけ

なんともおもはしておけ

とはいへ

このさんたんたるせいぐわつはどうだ

あの咯血にひきつゞくこのまづしさとするしみ

このさんたんたるせいぐわつを見る

雨がふればどこに棲まはう

風がふけばどこに寝よう

あゝかうして廣い野原をさまよふ小鳥のやうな自分達

自分はいゝ

自分だけならいゝ

またどんなことでもそれが妻や子どものためならばしのぼう

よろこんでしのぼう

けれど世にでたばかりのあかんぼの上にまで馴ひかゝるこのあらし  
これはどうだ



いかにもよい日和ひよりの中では  
そしてなにふそくなくくらせるときには  
どんな立派なことでも言へる  
どんな立派なことでも言へ  
それでよかつた  
だがいま自分は野獸にかへる  
これぐらゐのくるしみがなんだ  
自分はいゝ  
自分を打て  
自分の上にのしかゝれ  
愛するものよ  
おまへたちをおもへば自分は人間をわすれる  
そして荒野の獸になる

あゝ、自分は感謝する  
この人間としてのくるしみによつて  
このくるしみこそ  
神の大きな愛だといまは知るから  
きたれ  
それでも巢はみつかつた  
やつと身をいれるにたりるだけの四疊半と三疊との小さな巢  
梢にゆれてゐるやうな巢だ  
あのうれしさをおぼえてゐるか  
ひさしぶりでのんびりと  
つかれた機はた織のやうに足を伸ばした冷いうすいあの垢染みたかしぶとんの上を  
うすぐらい豆粒のやうな五燭電燈の光のしたでとぢた眼瞳を  
それでもぐつすりとよくねたあの夜を



だがまた朝となり

めざめればめのまへには雲のやうに湧きあがつて

自分達をまつてゐるくるしみ

大鷲のやうに爪を研ぎ

つかみかゝり

またかぶりつき

たうとう自分達は最後の銅錢一つすらのかさず搔きさらはれて既に十日餘

いまははや一枚の葉書も買へず

手紙はかいてもだすことができず

ひげはのび

からだはあかじみた

妻よおまへの薬もかへない

玲子よお父さんがおまへにはお伽噺でもしてきかせよう

やりたいけれどやることのできない

これはお菓子のかはりだ

いつしか空っぽになつてゐる嚙と齧

味噌も油もまつたくつきてゐるけれど

而もまだ米櫃のそこには穀粒が散らばつてゐる

その穀粒をみると

おのづからあはさる此の手だ

それでいのちはつながつてゐるのだ

絲のやうにもほそほそと

それもなかつたら

自分達はもうとうにむつまじく枕を一行にならべて

この生きのくるしみから

やすらかにゆるされてゐたんだ

おゝ妻よ

それから死んだおぢいさんよ



なにもかもこれなんです  
恨んでほくさいますな

すべては自分の意志からくる

自分はそれをしつてゐる

けれどこればかりのことでへし折れるやうな意志ではない

びんぼうがなんだ

びんぼうがなんだ

金銭のためにこの首がべこべことさがるとおもふか

はづかしいのはびんぼうではない

そのくるしみに屈することだ

強い大きな意志をもたないことだ

強い大きな意志をもて

妻よ

それはそれとして自分はおまへのまへに跪く

おまへは女であるけれど

まるで戦場のつはものやうだ

このせいくわつの戦場で

病める夫をみにひきうけ

わがみのことなどはおもふひまもなく

そのうへ

子どもらを育てはぐくむその忙しさ

妻として母としてのたえまなきころづかひ

自分はおまへが髪結ひをよんだのをみたことがない

いつも自分自身の手でかきあげる

結婚當時はそれでもやゝていねいに

顔や襟首にまでもすこしは氣を配つてゐたやうであつたが

此頃は髪もかんたんなぐるぐる巻き



ぐるぐるまきは自分も好きだ

それだとしておまへはすぎやこのみでするのではない

それはよくわかつてゐる

曇みかさなる苦勞から

あのふさふさした燕色の黒髪も

こんな黄蜀黍たろもつこしの房となる

そしていまはそれがかへつてよく似合ふやうな女になつたお前

それから手足のそのひゞやあかぎれ

なりにもふりにもかまはず

否、かまつてゐるまもたないお前

そしてまだ齡若なお前

それらが自分をものかげにつれていつてはよく泣かせる

自分はえらんだ道だからいゝ

自分は自分の道のうへに屍骸を横へるのだからいゝ

でもおまへたちまで犠牲にするかと

それが自分をくるしめる

妻よ

子ども達よ

自分はびんぼうだからとてもおもふやうなことはできない

おまへたちにぜいたくはさせられない

それはこんな人間を父にもち夫にもつたものゝふしあはせで

また實にお前達一生のわざはひといふものだ

けれどおもへ

金銭づくではどうともならない

一切のうへに立つもの

一切を征服するもの

一切の美の美

それをこのびんぼうやくるしみはあたへてくれる



みかけだほしではない  
正しいほんとの人間にしてくれる  
立派にかどやく人間であれ  
内から立派に

おゝ谿間をながれる雪水のやうなこのびんぼうのきよらかさは  
切られるやうなこのくるしみの鋭さは

あれあれ御覽

あの遠天に小さくみえて鴉が二羽  
けふのこのときならぬ強風に  
この風をつきぬけ  
この風をつきぬけ  
この大空を横切つて飛ばうとしてゐる  
そしてこの強風とたゞかつてゐる

その下は荒狂ふ大海原だ

どこへゆかうとする鴉らか  
遙にめざすかなたには巢でもあるのか  
かあいゝ雛でもまつてゐるのか  
人間はみな二十日鼠のやうにみすぼらしくも  
終日家にとぢこもり

氣をくさらし

火に獅嚙みつき

而もなほ縮み上つてゐるであらうに  
妻よ

なんといふ雄々しい鴉だらう

あゝ莊嚴である

相愛し

相勵ましてとべ



この強風をつきぬけろ

餓ゑかつあらそひののしりさはいでまつてゐるやうな怖しい波間に

いまにも叩き落されさうにみえ

それでゐてなかなか強い翼の鴉ら

人間もおよばぬほどの勇敢な鴉ら

ひらひらと木の葉のやうに

さうかとみればひきはなたれた弓矢のやうに

自分は耻ぢる

耻ぢながらも自分は讃える

おゝ自分達夫婦のやうな鴉ら

わが妻よ

しかしもはや暴風雨は自分達のうへを通過する

ミレーは彼等をたづねてきたその友になんと言つたか

よくきてくれた

君がきてくれなかつたら自分達はどうしただらう

自分達はもう三日間も食べない

だが子どもらのパンはさつきまでやつとまにあつた

それから妻君にむかつて

その友のもつてきたものをわたしながら

おい、これで薪木を一束買つてきてくれないか

寒くつてたまらない

みればミレーは汚ない木箱に腰をかけ

眞蒼な顔をふせ

ぶるぶるふるへてゐたといふではないか

妻よおまへも聞いたらう

これがミレーの言葉だ

これが眞實に生きようとする人間の言葉だ



この言葉は力強くも

自分を生かす

人間を生かす

何もかもしのんでおくれ

しばらくしのんでおくれ

いまは冬だが

自分に新しい芽のふくまでだ

翼の強くなるまでだ

そして飛び且つ驅出せるやうになるまで

跳ねかへれ、力よ

躍りあがれ、力よ

こんな自分は自分でない

こんな自分はいまにほんものゝ自分が生れ

一こゑ雄獅子のやうに咆えるとき

尻尾をまいてこそこそ逃げだす野良犬のやうな自分だ

いまにみる

いまこそ自分は自分を信ずる

妻よ子どもたちよ

よろこべ

このまぶしさを

このくるしみを

すべてはこのさんたんたるどん底から来る



莊嚴なる苦惱者の頌榮

天日燦して焼くがごとし、いって働かざる可からず

— ヨシノ・ヨシヤ —

神様

神様

けふといふけふこそはおもひきつて  
すつかりぶちまけます

どうぞおいやでもありませうが

一通りおきくください

神様

われわれ人間の前驅として

われわれの大遠祖おほおやとして

あゝ此の世のあけぼのにさびしくも

あのアダムとイヴとがうまれでてから

どれほどになりませう

もうそれは

ちらりとも日光の射さない

深い深いそしてはてしない濃霧の中で

一の古いかびくさい傳説として

その眞實性をすらうしなつてしまひました

その眞實性をすらうしなつてしまつた事實

いまではどんなとしよりでも嗤つて話しておりますが

わたしはそれが悲しいのです

神様

ようくおきくください

アダムもイヴも



あなたの御保護をうけて

あなたの樂園では

どんなにたのしかったことせう

天空をとぶもの

地を匍ふもの

ありとあらゆる生き物と

ありとあらゆる美しさをあつめたあなたの樂園では

どんなにたのしかったせう

のぞみもなく

ねがひもなく

雪もふらず

餓うれば撈取る手をまつてゐる果實があり

熱くなく

寒くないから

きものもいらす

うまれたまゝの眞ツ裸

そして睡くなればやはらかい草の床です

彼等はかなしいことも

くるしいことも

腹の立つことも

それこそ何一つ知りませんでしたらう

死ぬなどといふことは勿論

生きてゐることすら

それでゐて何の不足もなかつたせう

さうでせうか

何の不足もなかつたせうか

すべてのものは

彼等に美しかつたせう



彼等にたのしかつたでせう

彼等に快かつたでせう

彼等をそしてよろこばせたでせう

だが神様

あゝ神様

彼等には一の缺けたものがありました

それは自由でした

神様

あなたは彼等を創造りなされた

あなたは彼等を祝福なされた

そしてその彼等に

世界の總てのものをあたへなされた

それだけに

あなたは唯一つ

自由をだけは禁じなされた

なるほど彼等があつた蛇となつてあらはれた

悪魔の言葉をきくまでは

そんなことも知らなかつたでせう

彼等はいかにも自由のやうに見えました

然しまことの自由は制限をゆるしません

彼等はその制限をやぶりました

如何にもやぶりました

それがいけないと仰言るのですか

それはあんまりです

あなたは「どんな果實をたべてもいゝ

けれど樂園のまん中にある木のだけはいけない」と

さうですか

それです



それです

それが悲しい動機です

それが神様

何を暗示してゐるかよくあなたは御承知の筈です

あなたは全智全能の方です

それが樂園にはかうした木もあるとそれとなく

ひそかに告げてゐるのです

そればかりではありません

あなたは彼等の一切を知つてをられる筈です

その過去はいふまでもなく

現在もまたその未来も

それだのにあなたは彼等の爲るがまゝにまかせなされた

一方で禁じておいて

他方ではゆるされてゐる

なんといふ矛盾でせう

悪はそこから生れたのです

あなたは全智全能の方です

それだのにこれはまたなんとしたことでせう

あゝたまらない

さればとてあなたにくらべては物の数でもない

弱い小さい人間です

たゞ泣き寝入るほかないのです

それはともあれ

彼等は遂にその制限をやぶりました

そしてはじめて自由でなかつたことに気づきました

けれども遅い

あなたはすぐそれと知るが速いか

かつて一ど見せたこともない



怖しいお顔をして

お眼をぎろりと光らせて

彼等を睨みつけられたでせう

彼等はそれをみると

ふるへあがつてしまひました

そしてあゝ悪かつたとおもひました

その時からです

人間の

人間の此のたましひの奥深くに

暗い影のどこからともなくさすやうになつたのは

暗い影です

罪です

罪です

罪の巢です

神様

そしてたうとう彼等はたよりなくも樂園から逐出されたのです

あゝそのみぢめさ

そのむごたらしさ

その眼のまへにひろがる大地は

まるで沙漠ではありませんか

生えてゐるものは荆棘と薊ばかり

ごろごろした塊ばかり

彼等はたゞ呆然としばしは口もきけなかつたでせう

あなたはアダムに言はれました

「大地は汝のために誣はれる

汝は一生のあひだ勞苦してその大地から食物を獲るのだ

汝はその大地の草を食ふのだ

汝は面に汗してそれを食ふのだ



そしてまたその大地にかへるのだ  
なんとなれば

汝はその大地の塵からうまれたのだから」  
それからイヴにも言はれました

「汝はくるしんで子を産むだらう

われ大に汝の懐妊はらひのくるしみを増す」と

これがあなたのお言葉です

これがどんな響で彼等の耳に達したでせう

おゝ神様

彼等は曠野につゝ立つてあひかへりみたとき

たがひに犇と抱きあつたでせう

そしてたゞ泣くより外はなかつたでせう

神様

あなたが大地の塵からつくられた人間でさへ

親はその子を受してをります

その子のためには

われとわが生命も惜まないのです

人間の親がくるしみなげいてその世を儚なく生きるのも

全くその子のためです

全くその子を受するからです

それだのにあなたは

あなたはそれで何の後悔もありませんでしたか

厄介者を逐拂つてそれでいゝ氣持だと思ひでしたか

それにひきかへて彼等は

いつまでさうして抱きあつてめそめそしてもゐられません

靦面てきめんお腹が空いてくるのです

それをなんとかしなければなりません

といったところで食べ物はなんにもありません



どうしてもこの曠野沙漠を耕して  
そこで草の葉っぱにおかれる露のやうなその生命を  
そこでつなげなければなりません  
だがそれにしたところで  
ながいながいその海草のやうにのびた髪の毛がなんになりませう  
それからこれも伸びのびた手足の指のその爪  
そして木の葉のきもの  
武装といつても  
器具といつても  
これほかなんにもないので  
けれど神様  
あゝわれわれの大遠祖達の  
彼等はしづかにその手で涙を拭ひました  
すると不思議ではありませんか

にはかにその身内に  
ある噴水のやうなものが感ぜられました  
たしかにさうです  
それが力です  
いまゝではゆめにも知らなかつたものでは  
力です  
彼等はまだびくびくしてはをりません  
さあどんなものでもくるなら来いと  
彼等は氣強くなりました  
彼等は稍氣強くはなりましたが  
何をいふにも  
何としても  
たへられないのは空腹です  
彼等はたうとう手當り次第にそこらの草を噛みました



その草の葉つばの露を舐めました

そのくるしきは樂園のたのしさがたのしきであつただけ

それだけ酷いくるしみでした

彼等は樂園のことをおもひだすとたまらなくなりました

いつさんに走り歸つて

そしてあなたに罪をわびて

ふたゝびそこであなたの御保護のもとでくらしたいと思ひました

けれどさう思つてふりかへつてみると

どうでせう

あなたの怖い焔の劍がいつもぐるぐると旋轉つてゐるではありませんか

こんなことが幾度も幾度もくりかへされました

その度毎におもひなほしおもひなほし

だんだんその焔の劍もみむかないやうになりました

さうすると力がその上にその上に加はつてきて

そのくるしみとなげきの中に

小さな望みをまきつけました

それはほんとに種子一粒のやうな望みでした

そんなに小さくはあつたが

それは實に彼等のくるしみとなげきの凝固かたまつたものでした

それに喜びの光が照り

それに悲しみの雨がかゝり

それはいよいよかたく

研ぎ磨かれる寶石のやうにいよいよひかりかどやいてきましました

彼等はそれがために

どれほどその生命をそぎ削つたこととせう

而もそれがなんでせう

望みのためです

望みは彼等自身のものです



彼等自身のよろこびです

彼等自身の幸福です

彼等自身の光です

彼等はほつと息を吐きました

ですが神様

それもほんの束の間でした

みるとあなたの創りなされたものの中には

人間にとつてはそれこそ由々しい敵がたくさんゐました

あるものはおそろしい牙をもつてゐました

あるものは大きな角をもつてゐました

あるものは見えない刺をもつてゐました

あるものは毒をもつてゐました

あるものは底のないやうな怖しさをもつてゐました

あるものは木でもなんでも引裂いてみせました

あるものは手足の感覚をうばひました

あるものは眩暈かせました

あるものは死の豫感さへあたへました

まあ何と言ふことでせう

彼等はまるで生きながら地獄に陥されたやうでした

大概のものが人間の味方ではあませんでした

そこで彼等は考へました

(それは一種の閃きのやうなものでした

彼等にとつては初めてのことです

かんがへるなどといふことは)

これはなんでも抗はないがいゝ

いや抗はないのみでなく

一そすゝんで愛してやる方がいゝと

實際また愛してやるにいゝほど



それらの中にはうつくしいものがありました  
柔順なものもありました

然しその大部分はこつちの思慮なんかで何とも感ぜず  
どしどし突進してくるのです

いゝ匂ひをかぎつけた蒼蠅のやうに群集してくるのです  
それが追へば遁げるやうなものではありません

遁げれば猛つて追驅けてくるし

追はれゝば追はれたで

怒り狂つてむかつてくるではありませんか

あゝ人間最初のそして大なる苦惱者

彼等はさうしてそれらを

樹の上にさけ

土窟つちくさの奥にさけ

また水の中にさけました

而もいたるところに於て彼等は敵にであひました

ときには衝突もしました

攻撃もしました

そして打倒し傷け殺してやつとその身をまもりました

そして幸に生きながらへたのです

くるしめばくるしむほど

力が加はり

智慧がまし

ますます彼等は強くなるばかりでした

やがて耕した大地はよい穀物をみらせました

立木をそのまゝの柱にして

大きな樹木の下かげに

彼等は家らしいものを造りました

いつしか妊胎みごもつてゐたイヅは



そこでカインを産みおとしました

その時アダムはおどろいて言ひました

「あゝ自分等は神様によつてこゝに一人の人間を得た」と

どんなに喜んだことでせうか

それは彼等にとつては

闇夜に一つぼつちりとともる灯をみつけたやうなものでした

すこしも神様をうらんでなどはをりません

すこしでもあなたに對して不平がましいことを言つてはをりません

見上げたものです

あなたのその残忍にもひどい聖旨みことばにくらべて

何といふいぢらしいほどの敬虔けいけんでせう

だがそれはまた

何といふおほきな海のやうな心でせう

あるひは不平も怨恨うらみも全然なかつたのでもなかつたでせうが

子どものうまれたよろこびで

それらはみんな流れるやうに消え去つてしまつたのかも知れませんが

たゞ咄言つとやま一つ泄らしめてゐないのは事實です

神様

彼等はさうしたくるしみの中で

よせてはかへし

よせてはかへし

彼等の上へのしかゝるそのくるしみの間にあつて

どうぞおきよください

ああ咄言つとやま一つ泄らしませんでした

神様

神様



どうぞよくお聞きください

彼等の望みはカインをかれらの手にいだけさせて

さらに何をか求めてみました

つゞいてアベルが大きな太陽をみにでてきました

アベルは羊を牧ひました

カインは土を耕しました

二人ともその父母のやうにあなたの前に柔順でした

けれどあなたは公平を缺いでみました

あなたはカインの供物をしりぞけて

アベルのそれだけうけられた

それはどういふ譯です

なんでそんな依估ひいきの事をなさつたのです

カインの腹立つたのは當然です

あなたが腹を立たせたのです

そしてカインをして

大逆非道の血をながさせたのです

あなたがアベルを殺したもおんなじです

あゝ大地は血塗られました

あゝ殺すなかれとおしふるあなたが

かうして人間に罪の歴史をかゝせるのです

かうして人間を汚すのです

かうして人間をその生けるかぎりくるしめるのです

愛するがゆゑに鞭打つのだとは

それは人間のうつくしいそしてけなげな言葉です

それはあなたのお言葉ではありません

あなたはちやうど人間のこどもらがその玩具おもちゃとあそぶやうに

われわれ人間に對してゐられるやうです

可愛がつてゐるでせう



だがこはれるまでその手から離しはしません  
必然きつといつかは壊はします

而も責任なんか感じはしません

こはれたら棄てるまでです

泪なんか流しはしません

よし流したところで

それはおもちやを愛してははなく

それによつて自分自身が傷けられたからです

あそぶおもて對手がないからです

自身に腹を立て

神様

彼等はずひに老ひ衰へて死にました

アダムもイヅも死にました

アベルを殺したカインも死んでしまひました

そのあとからぞろぞろと生れたものも

みんなくるしんでくるしんで

くるしみぬいて死にました

誰だつてみんな死んでしまふのです

あなたはさう人間をつくられたのです

人間がなんでせう

人間がなんでせう

よろこびもかなしみも

榮譽も努力も富も權威もそれがなんでせう

たゞ死です

酬いられるものはそれだけです

神様

まったくあなたにはかなひません

まったくあなたのさづけた運命どほりです



まつたく人間は惨めなものです  
まつたくあなたの勝利です

だが神様

それで總てどはありません

おきくください

われわれはくるしみくるしんできたあひだに

いつとしもなく強くなりました

運命をすら嘲るほどになりました

くるしめられるのをかへつて喜ぶやうになりました

くるしむといふことによつて

一きわその體からだにおいても靈魂たましいにおいても強く

純くそして美しくなることをまなびました

死ぬためにうまれるやうな人間も

いまはその死すら怖れてはゐません

それは多勢の中にはよくよく意氣地のない人間もあります

如何にもかれらは死を怖れます

怖れてゐるやうです

然し彼等といへども死の不可避であることは知つてゐます

だからと自暴自棄に陥りません

ある諦認をもつてゐるから

事實その死に面接しても決してあはてふためくやうなことはありません

寧ろある快感にすら自己をあたへて

静に眠つてゆくのです

神様

あなたは人間に運命のその最終最悪のものとして

死をあたへられました

そしてそれがあなたの決定的な勝利です

さうです



はたしてそうでせうか

神様

それはあの鰻がつるりと指と指とのあひだを迂りぬけるやうに  
御覽ください

人間は精神的にひよつこりとその死のうしろに現れて  
赤い舌をべろりとだして笑ふので

それほど人間は伶俐さっしくなりました

われわれの大遠祖が智慧の木の實をたべたからかも知れません  
それほど伶俐さっししくなつてゐることをどうしませう

そればかりは如何なあなたでも

あなたの全智全能をもつてしても

どうしやうもありますまい

それもこれもくるしみくるしんだその経験の賜物です

あゝ此處でのみです

人間が人間らしくそれ自らの意志で生きてゐられるのは

ぶつ倒されるときも曲げない意志

曲げられるときも折れない意志

殺される時も死なない意志

大地の塵でありながらその大地をも踏みつける意志

さては創造者であるあなたですら

その意志にかゝつては火に觸れたやうに手を焼くでせう

詩人はきつぱりと言ひました

息絶ゆるとも否と言へ

それでこそ人間だと

けれど神様

人間がこの意志をかちうるまでに

ながした泪

ながした汗



ながした血

それはまことに普通大抵のものではありませんでした  
みんなあなた故です

智慧の木の實のことは言はないでください

食べてならないやうなものを

なぜあなたは彼等の眼の前にをかれたのです

それもみれば食べたいやうに美しくして

それではまるでおとしあなでもこしらへておくやうなものです

それもわが子としての人間に對して

いやいや神様

こんなことはすべて泣き言のやうに聴こへて耳ざはりです

さて神様

すべて優秀な人間は運命にもてあそばれません

また死にも吞噬のみこされません

はがね  
刃金のやうな意志として

あなたですら尊敬しなければゐられないやうな光を射つのです

世にはあなたを信じ

あなたに頼るたくさんの人人があります

あなたを信じ

あなたに頼り

あなたを崇め

あなたをあふいでをりながら

それでゐてそれこそろくでなしの人人が少くはありません

大抵さうした人間は意氣地なしです

さうかとみると

あなたのことなどは何にも知らず

また知つてゐても信するでもなし頼るでもなし

而も立派な人間があります



あなたは信じられたよられて

その人人に乞食のぼろのやうにぶらさがられるのが好きですか

それとも冷淡なやうには見えても獨立自尊

そして謀舌らず跳ねず

堂々とそれこそ靜肅にをもをもしく

その自らなる天真唯一の道をゆくものが好きですか

優秀な人間はいたずらに信賴しません

よつてたかつて騒ぐのは蛆蟲です

「われに來れ

われ汝らを休息せん」とおつしやつて御覽なさいまし

蛆蟲はよろこんで群りますが

人間の中の人間はそれにお答へします

「ありがたうございます

これぐらゐのことは何でもありません

私などよりもつともつとあなたの必要な人人がをります

私にはどうぞお構ひなく」と

その人はたいさう疲れてゐるやうです

然し健氣にもさう言ひます

そればかりではありません

神様

そのひとはそのときかへつて何かあなたがこまつてゐるとすれば

それを自分で代らうとさへ言ひ出すかも知れません

そのひとは神様にすら手傳はうとします

蛆蟲のやうなあなたの信賴者には不可能なことです

彼等は唯、主よ主よとよばはつて

それで貴い日を暮らすのです

それで救はれるとおもつてゐるのです

てんでもう自分のことばかり



それも牡丹餅で頬つべたを打たれるやうな幸福ばかり

それを祈りもとめてゐるのです

その周囲になげき悲しんでゐるひとびとの聲が聞えないやうです

卍たその惨めなすがたも暗えないやうです

いや、きこえないではありません

みえないのでもありません

よくきこえてゐるのです

よくみえてゐるのです

そしてよく知つてゐるのです

ですがもう癡癡病みのやうにあなたに凝固まつた彼等は

あなたを信頼して

それに満足して

それにすつかり惑溺して

もうまつたくその癡癡的悦樂に

その指一本それがために動かすのすらものういのです

それがあなたの忠實な信者です

彼等はあなたに酔つてゐるのです

あなたのためには親も子も夫婦もなんにもありません

あなたのためには自分も他人も

眞理も美も理性もなんにもありません

まるで狂人です

さうしたひとびとをつかまへて

「たゞ信ぜよ

信するものは救はれる」と

あゝそもそもの誤錯はそこにあるのです

あなたがそんなことを

あなたのお教へとして傳へさせなさらからいけません

一切教へてはいけません



何もをしへないでください

人間はどんなことでも自然にそれをさとりませう

そして終にはあなたに手傳ふまでになるのでせう

いや手傳ふではありません

一しよに仕事をするのです

そのひとです

人間の仕事と神様の仕事とになんの差別もおかないのは

それが優秀な人間です

神様

だがそのひとは決してあなたに盲従しません

あなたをすら批判します

あなたをすら試験します

あなたが完全圓滿でないなら

その缺點を指摘します

あなたを自分の神様とするためにはほくら一つほどのことも

そのまゝには見遁しません

而もそのひとは自分が大地の塵であることを知つてゐます

そのひとの謙讓には底がありません

そのひとは人間の知識を<sup>そら</sup>天空の星の一つともおもつてはゐません

それでゐて

そのひとは自分を棄てません

これを優秀な人間といひます

間違つてゐませうか

そのひとは私の事です

神様

私はあなたを認識します

莊嚴なる苦惱者の頌榮



私はあなたを體驗します

けれど私はあなたにたよりはしません

多くのものはあなたを認識しません

また體驗もしません

唯、頼るのです

唯、頼るばかりです

たよつてそしてその應顯を求めるのです

もとめてそして得られないと

失望してつぶやくのです

つぶやきながらも尙も求めるのです

然しそれでも得られないと

そこであなをうらんで憎んで棄てるのです

無神論者といふのがあります

卑しい利我的な慾望の躰へつたものです

みかけはいかにも寂靜で

淡然としてゐるやうだがそれは欺いてゐます

とにかくたよるからいけないのでせう

たよつて何になりませう

人間のそのときどきに變る天氣模様のやうな願望のために

儼然たる宇宙の法則がまげられますか

一體、宇宙は人間のためにあるのでせうか

それとも人間がかへつて宇宙のためにあるのでせうか

また願望は法則のためですか

法則が願望のためなんですか

私は宇宙の法則といひました

それはあなたの聖旨みことばといつてもおなじことです

また萬人は萬様のこゝろをもつてゐます

したがつて萬様の生活をします



その願望も萬様です

傘商には雨の日がよく

染物屋には天氣がよいのです

如何にも萬人一樣の願望があります

けれどそれはあなたにたよるものゝ願望ではありません

あなたにたよるひとはあなたを體認してゐるやうで

實はさうではありません

眞にあなたを體認してゐるひとは決してあなたにたよりません

眞にあなたを體認してゐるひとは萬人共通のこゝろを持つてをります

私はあなたにたよりません

あなたは人間のたよるべきものではありません

神様

私はくりかへして言ひます

私はあなたにたよりません

私はあなたを體認します

此の體認がすなはち私の信仰です

此の信仰は懷疑的です

此の信仰が深くなればなるほど懷疑がそれだけ大きくなります

懷疑は勇敢です

懷疑は眞實です

懷疑は火花をちらします

懷疑は悲痛です

懷疑はより大きな信仰をもたうとするものゝとほらねばならぬ道です

私はあなたを體認します

あなたに對する私の體認はむしろ反抗的です

あなたは私の敵です

敵といふ言葉が穩かでないとするれば對象と言ひませう

あなたは私の對象です



あなたは人間の対象です

あなたなしに私は一日たりとも生きてはをられません

あなたはわれわれの理想です

願くば無限に大きな理想であれ

神様

われわれはあなたを理想として見ます

どういふものでせう

一の癖です

ところが實際のあなたは

われわれ人間ですらが顔面かほをそむけるやうなことを平気でなさるのです

われわれ人間ですらと言つたのは

開闢以來くるしめくるしめられてきた間に

いつとなく

その手にしつかりと掴んだ悪です

われわれは悪い人間です

いかにも悪い人間です

あなたの罪の子です

けれどそしてほそくはあるが良心とやらいふ一とすぢのうつくしい煙を

猶おのおのゝその燻香の壺から立てゝゐます

われわれは恥を知つてゐる

あなたにはそれがありません

あなたの御業はすべて神聖でそして慈悲深いやうに誰も思ひます

さうでせうか

それはあなたの御相おすがたも時代によつていろいろと

それこそ猫の眼玉のやうに變轉して

いつもおんなじではありませんでしたが

それにしてもなかなかわれわれの理想とすることのできない

そんなことをなさることがたびたびありました



樂園追放のことはいひました

創世第一の人殺しのこともいひました

それからさまさまのことがありました

そのなかでもあなたが悪魔もしないやうなことをなされたのは

バベルの塔のことです

その場合のあなたはまるで賽の河原の鬼です

それが生めよ殖えよ地にみちみてよと

祝福なされてゐるあなたの人間に對する御業です

それからノアの大洪水です

凡そ世にざん<sup>ん</sup>にんといつてもぼ<sup>う</sup>ぎやく<sup>く</sup>といつても

これほどのことがありませうか

言葉以上のことです

感情以上のことです

人間あつて以來の

それこそ人間にとつては言語に絶した大兇禍でした

二どとないことです

それともあなたは氣まぐれですから

そのお腹<sup>はら</sup>の蟲のゐかげんで

どんなことをやりだしたさるかも知れません

だが神様

人間はもうくりかへしくりかへし酷い目にばかりあつてゐるので

善い經驗をしてをります

それで強くなつてをります

あなたのくだす天の災害にであつても

もうびよこびよこ頭をば地べたにすりつけぬほどになりました

それはさて

ひとびとのこゝろがあなたを慕ふよりは

各々飲み食ひめとりとつきなどしてたのしむやうになつたといふ理由で



あなたは腹を立て

あなたのすきなノアの一家族をのぞいての外はことごとく

彼等を水に溺らしてしまひなされた

大逆殺です

人間界に於てならその一人を殺しても

それは不倶戴天の罪惡なのです

相助けるに術もなく

相呼びかはし

相擁き

一寸ちの髪の毛ほどのものにすら

すがりすがつて生き存らへようとした彼等の

その悲鳴をあなたは

小氣味よくおきよなされてか

あなたは神様です

なんでもできます

なんでもしようとおもへばできるだけそれだけ

あなたの御眼からみるならば人間が一びきの蟻をみるそれほどでもなからうものを

まことに憐憫あはれみの無いなされかたです

われわれは馬鹿な子ほど可愛いといひます

もつともです

馬鹿なもんだから

馬鹿でないものより一層愛されなければならぬのです

それがあなたになると

なんでもかんでも運命的です

あなたに嫌はれたが最後です

あなたはいかにも正しいやうです

正義の神様のやうです

正義のためには愛もなあはれさげもないやうです



あゝ正義

善を善とし悪を悪とする秋霜烈日のやうな威厳

ひきぬかれた刃のやうな精神

それはいゝ

けれどあなたの正義はあてにならない

あなたは神様です

だからあなたにあてる尺度はない

あなたは自ら尺度とならねばならない

だがあなたの氣まぐれを尺度としたら此の世界は闇です

これでもどうかかつかやつてゐるといふのも

全くわれわれ自らの生活にあてはめて

その最も善美とするところを

われわれ自らの意志でつくりあげたその道徳によつてです

あなたによつてとはありません

あなたは道徳圏外の存在者です

われ／＼の中には道徳はあなたからきたといふものもありますが

それは空想です

その兄の家督権を巧妙な詐欺によつて横取りした

あのヤコブを愛し保護して

あの大家族の家長としたほどのあなたではありませんか

何が攝理です

攝理とはあなたの氣まぐれのことですか

まつたくあなたの御心は解らない

あゝ此の世のあけぼのにさびしくも

あのアダムとイヴがうまれでてから

どれほどになりました



神様

千年萬年もあなたにはたゞの一瞬のことです

われわれ人間の一生としては勿論

それはとても信じられないほどの距離をもつた長時間です

その間において人間にはさまざまのことがありました

人間は絶えずくるしめられるしめられてきました

みんなあなたの御掌おんての中にあつてのことです

そしてかなり悪くなりました

人間は悪くなりました

けれど強くなりました

強くなりました

あなたに憎まれ

あなたのくだした運命にもあそばされて

くるしんでゐるものを見れば

それがあなたであらうが何であらうが

自分自身もまつたくわすれて

用捨なく

逡巡なく

ふるひたちます

切齒はがみします

髪の毛をもつて天を衝きます

その天をにらみつけます

その天をずり落さうと腕を鳴らして大地を踏みます

神様

あなたはわれわれの大遠祖を樂園から逐ひだしなされた

さてこんどはわれわれ人間はこのにんげんの世界から

あなたを追放する時です

あなたはそれほど深い怨恨をわれわれの胸に醸しました



もうわれわれは騙されません

われわれ人間がこんな怖しい企圖をもつたといふのも

みんなあなたの御業ゆゑです

こんな人間は悪くなりました

いまではこれが天性です

あなたの御業の影響から自らうまれてたものです

こればかりで生きて行かれる

人間にとつてこれは貴い崇高い力です

神様

人間は自主です

もうあなたの奴隷ではありません

此の貴い崇高い力のうへに立つた人間

御覽ください

この人間のかどやかしさを

光りかどやく人間を

まるで神様です

あなたのやうです

さうです

人間はだれもかれもあなたにかはつてみな神様であるべきです

各自は各自の神様であるべきです

あなたは人間最初の男女を塵からつくりなされる時

それをあなたの御像に似せられたといふことです

似せられたものがいまはほんものになる時です

われわれは自主です

もはや一たび自覚したものです

どうしてまたその檻舎ほどの意味しかもたない

あなたの樂園にさもしくも豚のやうにかへられませうか

もうかまはないでいたよきます



指一つ觸れてもく下さいませんやうに

これが人間のおねがひです

われわれ人間はもうあなたにかへるべきではありません

それをよく知りました

あなたは人間のたよるべきものではありません

まだその迷宮の闇にゐて

眞實なひかりの世界への望みの絲をみつけないものもありますが

時はもう近づきました

やがてそのひとびとも知るでせう

何物もたよつてはならない

何物もたよれない

何物にもたよられてもならぬと

すべて自然であれ

たよることでない

たよられることでない

たよらうがたよるまいが眞理はやはり眞理であります

理想としてのあなたもさうでなければなりません

だがわたしにはあなたのお心はわからない

神様

あなたは一體どんなお心です

氣まぐれかとおもへば正しいこともあり

正しいかとおもへばとんでもないことをしでかしなさる

ほんとにわかりません

愛されてゐるのか

憎まれてゐるのか

めぐまれてゐるのか

鞭打たれてゐるのか

さらに人間はあなたの子なのか



それとも全然塵の塊りなのか  
まったくわからない

わかたつてどうならう

事實は事實です

現在<sup>いま</sup>は現在です

過去は一點一劃のあやまりもなくその通りですし

未來もちやんとなるやうにしきやなりはしません

實に公明です

秋の天空のやうにはつきりとしてゐます

だがあなたのお心ばかりはどうしてもわからない

それもさうだが

神様

あなたは全體何者ですか

おどろかないでいただきます

早晚こんな質問は當然あなたにむかつて發せらるべきでした

何とお答へになりますか

それとも永遠の沈黙で有耶無耶のうちに葬り去つてしまはうとなさりますか

その手にはかゝりません

そんなことでおとなしく引込んでゐるやうな人間ではなくなりました

何とか言つてください

耳がありませんか

眼がありませんか

口がありませんか

あなたは何です

形體<sup>かたち</sup>のあるものですか

それとも觀念ですか

實在ですか

空想の所産ですか



あなたは何です

何かであるはずで

力ですか

生命ですか

有ですか

無ですか

なんでもいゝ

なんでもいゝ

それが何だつてわれ／＼人間はかまひません

どうにもならないからです

あなたの有無が何です

あなたが有らうが無からうが人間は人間です

その人間はくるしんできました

そして悪くなりました

けれど強くなりました

その上、あの原人アダムとイヴとが

一鍬一鍬と曠野たかのの土をたがやしたやうに

そしてそこに此の世界のはじめを拓いたやうに

われわれもまたすこしづつでも

すべてのものを

人間のこのびめうな感覚と神経とで

自分自分のこゝろに

自分自分のものとして見出さなければなりません

さいはひにも彼等が智慧の木の實をたべてゐてくれたから

自分達にそれができます

いかにも此の宇宙天體の麗さなどよりみれば

その偉大に幻惑されて

そこにはたしかにあなたがあり



あなたこそまことにその創造者のやうに思はれます  
けれど神様

さうおもふのはわれわれです

われわれにはまたそれが否定もできるのです

われわれの智慧において

あゝ此の智慧

それをこんなに大きくしたのは人間です

それをこんなに荘嚴にしたのも人間です

われわれの力でゝはありませんか

われわれではありませんか

いまこそ人間は一切の上にあります

あなたでもわれわれあつてのものではないのか

あゝ智慧の木の實ばかりでなしに

またとないそのよい機会を

ほんとに、手つひでに

その生命の木の實もたべてしまへばどうでしたらう

私はそれをしみじみ思ひます

然しもうそれは漠々たる太古のことです

あんまりあてにならないことです

なにがなんだか

一切がわかりません

たゞ瞭然たるものはわれわれです

人間です

人間各自の存在です

それだけです

あなたは理想です

無限大なる理想であれ

神様



もうすこしおきください

私にもすこし喋舌しゃべらしてください

悪魔にひとこと御禮が云ひたいのです

ごめんなさい

さて悪魔よ

あの時お前さんがわれわれ人類の前驅者である彼等に

あのお美味い智慧の木の實ををしへて

そして食べさせてくれたばかりに

彼等をはじめその後裔としての人類すべては

それはそれは泣かない日とはなかつたのです

だがまたそのお蔭で

われわれ人間はいまこのとほりな伶俐さかしいものとなりました

ありとあらゆる物の上に立つてゐるのもそのためです

神様にすら運命にすら

だらしなく跪かなくなつたのもそのためです

一にはそのながいながい苦しい経験にもよりますが

その動機はと云へば

お前さんの手引からです

われわれはお前さんに何と感謝したらいいでせう

ところがこれも神様の嫉妬からのことだが

お前さんとわれわれの間は

一尾の魚を二つに截切つたやうにされてしまった

そればかりか

お互はおなじく酷い目にあつてをりながら

相互になぐさめ合はうとはせず

かへつて眼を雙方でむいて睨めあつてゐるのだ

いつまでこんなことをしてゐてよいものか

どうして理解出来ないのか



どうして和睦出来ないのか

人人はもう悪魔ときけば震へあがつておそれてる

それでゐて降服はしない

降服しないのはいゝ

降服しなくてもいゝから

和解しろ

ところがそれもできないんだ

神様の御機嫌を損じたらそれこそことだとおもつてゐるのでだ

何といふ意氣地のないことだらう

神様もまた神様なんだ

「敵をも愛せよ」などをしへておきながら

随分、厳しいんだ

それこそ敵とみたらなか／＼人間が蚤や虱をみるとは違ふんだ

おそろしい神様なんだ

一刻の容赦もないんだ

一寸の躊躇もないんだ

徹頭徹尾なんだ

絶對的なんだ

もう本質としてゆるさないんだ

お前さんもよく知つてゐたらう

ずるぶんつらからう

「汝はアダムとイヴとを誘惑し

かの智慧の木の實をくらはせたるによりて

諸もろもろの家畜と野のすべての獣よりもまさりて咀はる

汝は腹匍ひて一生のあひだ地の塵をくらふべし」

神様がはら立ちまぎれにさう言つてからの

お前さん達は實に惨めなものになつた

わたしはそれを氣の毒におもふ



そればかりではないんだ

神様は御自分の疳癩玉をとこしへにお前さん達と人間とのあひだにおいて絶えず爆發させようといふんだ

そして御自分はそれを高みでの見物さ

「われ汝と婦女の間

および汝の苗裔すゑと婦女の苗裔とのあひだに怨恨うらみを置かん

かれは汝の頭をください

汝はかれの踵をくだかん」だと

いゝ顔面の皮だ

なるほど最初はわれ／＼の大遠祖達もお前さんをよくは思はなかつたらう

お前さんさへ誘惑してくれなかつたらと

つらいめにあふにつけ

かなしいことにあふにつけ

さう思つたにちがひない

けれどだんだんいろいろと事と物との真相がわかつてくると

お前さん達はもう人間の敵ではなくなつたのさ

却つておんなじやうに酷い運命のあらしにあつてゐる友達なんだ

それがわかつたんだ

それがわかると人間の生活もさりと一變しましたよ

お前さん達をはじめ

あらゆる生物に對して人間は

人間同志の間にしかもつてゐなかつた愛情を

汎くそして普くもつやうになつたんです

神様はそれが氣に喰はないんだ

でもまさか愛してはならないとも言へないので

知らん顔をしてゐるんだ

見ないふりをしてゐるんだ

何故なら萬物を人間がその對象とするやうになると



唯一存在と自認してゐる神様は  
神様としてのその面目をうしなつてしまふからだ  
で内心頗る怒つてゐるんだ

「自分以外の何物をも拜んではならない

自分の創造物を拜んではならない

また汝等のつくつたものを拜んでもならない

自分は天地の神である」

あの馬鹿正直なモオゼに

あの頑愚なひとびとの指導者モオゼに

その頑愚なひとびとにむかつて

鐵面皮にもさういはせたが

それも線香花火のやうなものであつた

まあ見な

これが神様のお言葉だ

何といふ自己推舉だらう

何といふことだ

いまどきのあのすうくしい商人などの自家廣告もこれまでだ  
かうなると

へん、何とでも言ふがいゝや

どんなにでも威張るがいゝや

拜みたけりや催促されないたつて拜みますが

拜みたくなけりや

この口をふんざかれるつたつて拜みやしねえよ

とでもつひ言ひたくなるんだ

またさうした自由を實際にわれわれはもつてゐるんだから

お前さん達も時々退屈まぎれの悪戯いたづらから

われわれの生活がそれで

ちよいと蚯蚓くわだまばれになるぐらゐのことはするが



それはほんの悪戯だ

名からして悪魔なんだから

それつばかりのことは敢て咎めるまでもないのさ

神様の遣り口からみると

ほんとに可愛いぐらゐのもんだ

人々は一切の不幸災禍をみんなお前さん達にしてゐるが

あれは全然まちがつてゐる

一切の運命は神様のお手のものだ

死ですらさうだ

決してお前さん達のことぢやない

何でもかでもみな神様のことだ

それを善いことは自分のものとして

悪いことはみんなお前さん達になすりつける神様

すべてがそれです

またそれを真正直にその通り信じきつてゐる馬鹿なものもあるんだ

だがもう夜は明けなければなりません

人間はみんなめざめなければなりません

その時が来たんです

誰でも自分で自分をやしなつてゐるのです

自分で自分をまもつてゐるのです

自分で自分をなぐさめてゐるのです

自分で自分を鞭打つてゐるのです

自分で自分を導いてゐるのです

自分々々です

それ外無いのです

それはちやうど燕などが海上でもわたるやうなものです

ひとのことなどは言つてゐられないのです

然しそれでいゝのです



そればかりでおたがひは強く仲善く生きられるのです  
さうです

そのやうにしてまづ自己が確立してゐなければ

どうしてひとの上にだつてその手がやさしく伸べられませう

人間はそれを知りました

人間はそれを知りました

まあ何といふすばらしいことぞせう

人間にとつては

第二の天地開闢です

第二ではありません

これが眞の曙です

人間の靈魂の曙なのです

如何にもあゝのときアダムとイヴとは生命の木の實をたべませんでした  
だがそれがなんでせう

人間は自分の足でこの大地を踏まへてゐるのです

自分の手でさまざまの戦争の器と生業なまはひの器とをつくり

自分の眼で見

自分の耳でき

自分の鼻で嗅ぎ

自分の舌で味ひ

自分の口でいひ

自分の頭脳にふかくこもつたその智慧でどんなことでも考へます  
かぎりなきいのちすらいまは知つてをります

運命などはもう人間にとつてなんでもありません

われわれはそれをすつかり逆にすら考へることが出來ます

もう人間は自由です

人間は永遠の意味をしりました

そしてその永遠を瞬間に生きてをります



神様

あなたの創られた愚かな人間どもの中には  
あなたを愛の神様だなどとあがめて  
それでいゝ氣になつてゐるあんぼんたんがをります  
それがかなり澤山をります  
あなたは愛の神様ですか  
いまもむかしもあなたは決して愛の神様ではありません  
あなたは苦痛の神様です  
あなたは怖しい神様です  
あなたは暴逆な神様です  
あなたは無情な神様です  
あなたは貪慾な神様です

あなたは身勝手な神様です  
あなたはきまぐれな神様です  
あなたは眞實のない神様です  
あなたは自惚な神様です  
あなたは酒好きです  
あなたは喧嘩好きです  
あなたはをんな好きです  
あなたは人間の涙をこのみ血をこのむ神様です  
人間と人間とのあらしひ  
人間と人間以外の生物とのあらしひ  
人間と自然とのあらしひ  
すべての争ひの種子を播くのはあなたです  
あなたが不吉の火元なんです  
かの大洪水で全人類をこの地上からすつかり滅亡ぼしつくされた時



お氣にいらぬのノアとその家族だけは残されました  
そしてたいへんなあの長雨の雨上りに  
大空にうつくしい虹などをみせてよろこばれ  
ノアにむかつて

その子孫をかぎりなく祝福すると云はれてゐながら  
あなたの本性はまるで空をゆく雲です

そんな契約などをまじめくさつて守つてゐるやうなあなたではありません  
嘔吐きのあなたは

けろりとした顔をして

すぐ人間窘めにとりかゝりました

あなたの人間窘め

あなたの弱い者窘め

それはもういまはじまつてのことではありません  
めづらしいことではありません

まがなすぎがそれです

ひまさへあるとそれです

日々のことです

夜の目もそれです

とても一々ならべたてられたものではありません

人間あつて以來ずつと絲のやうに引きつゞいてきたことです

いまといふいまでそれがためにどんなに人間は泣いたでせう

あゝおもへばよくもよくもこんなに憎まれて來たものです

こんなに憎まれ苦しめられながら

生きてきたのが不思議です

生きてゐるのが不思議です

いや、それでこそ人間なのです

たくさんくるしめてください

それが人間に堪へられるか



根競べです

力をゆるめないでください

可哀さうだなどはゆめにもおもつてはくたさいますな

愛されたくないのです

愛されると弱くなります

強いところが人間の価値です

そればかりです

意地です

此の意地があるのでばかり生き存へてきたのです

あゝ此の人間

神様

おきよでせうか

どうぞよくおきよなすつてください

あなたは混沌から此の世界をばつくりなされた

あなたは光をつくりなされた

あなたはその光と闇とをわかちなされた

あなたは朝と夕とをさだめなされた

あなたは夜と晝とをさだめなされた

あなたは穹蒼をつくりなされた

そしてその穹蒼と大地とをわかちなされた

その穹蒼を天とよび

地に水のおつまれるところを海とよび

地には青草と

實<sup>たね</sup>を生ずる草と

おのづから核をもつところの樹々と

それらのものをつくりなされた

あなたはまた

夜と晝とにしたがつて



季節をさだめ

日をさだめ

時をさだめ

かどやく二つの光をつくり

その大なる光をして晝を司どらせなされた

それが太陽です

その小さな光をして夜をまもらせなされた

それは月です

あなたはまた水には魚ら

天には鳥と羽ある蟲蟲

地には獣とすべての這ふもの

それら諸もろくのものをつくりなされた

いやはてにあなたは大地の塵より人間を

この人間をつくりなされた

それを男となし

女となし

男にはすべてのものに名をつけさせ

女をばすべてのものゝ母となされた

そしてすべてのものをその人間に與へなされた

その人間即ちわれわれの大遠祖に

すべてのものをあたへなされたといふ

すべてのものをあたへなされたとはいふが

何一つあたへなされはしませんでした

それこそ何一つ

けれどもいま人間は一切の所有者です

此の一切はみんな長い長いその年月のあひだの

くるしいくるしい努力から勝ち得たものです

われわれ自らのものです



いまからおもへば

あなたのわれわれ人間のためにつくられた此の世界は

それはそれは人間にとつては

不都合極まるものでした

われわれ人間の生活を脅かすものがみち／＼てゐました

いまも頭を列べてをります

大方征服はしましたが

まだまだたくさん残つてをります

而もいつかはみんな降参させてしまふでせう

それを考へるとたのしみです

いふにいはれぬよろこびです

とにかく世界は

此の世界のはじめは

荊棘と薊と石ころばかりのそこはひどい曠野でした

それをこんなにしたのです

それは人間です

人間が此の世界を拓いてこれほどにしたのです

かくもよくしたのです

かくも美しく見られるやうにしたのです

もうやめます

いくら言つても際限のないことですから

神様

どんなにかおき／＼ぐるしかつたでせう

すみません

だがかうして何もかも言つてしまふと

此の胸がせいせいします



これはいゝことです

かうして何のかくしたでもなくすべてを披瀝することは大切なことであるらしいことです

お互の理解の上に

これほどいゝことはありません

たゞわれわれにもならないのは

あなたのお心のわからないことです

あなたは永遠の祕密ですか

さうです

さうです

そんなことは何だつていゝのです

こちらのころさへわかつてゐてくだすつたらそれでいゝのです

神様

世はさまざまで

世の中にはあなたを知らないものも澤山あります

あなたを知らないのです

知らないからたよらないのです

それでも生きてゐます

あなたを拜んだり

あなたに大願をかけたりますために

一錢半錢のはしたがねをあなたの賽錢箱にうやくしく投込む人々より

またあなたをお宮の中に祭りこんだり

眼ざはりにならない神棚の高いところへ押上げたりして

あなたを鼠の族と同棲させ

あなたを埃だらけにしてゐながら

それでも自分は信心深いと自惚れてゐる人々より

彼等はあなたを知らなくとも

彼等はあなたにたよらなくとも



彼等がいかに淳朴ですか  
彼等がいかに善良ですか  
あなたを知らないだけそれだけ彼等は天真爛漫です  
たまたま彼等のあるものが  
ちよつとまちがつたことでもすれば  
すぐ大袈裟にもあなたを知らないからといふ者があるので  
あなたを知らないからでせうか  
或はさうかも知れません  
そんならあなたを知つてゐないといふ理由で  
彼等を責めないでください  
人々の中にはあなたを知つてゐるといひまた知つてゐながら  
悪いことをする者があります  
あなたを知らない彼等などより  
それはそれは大へんな罪を犯すものがあります

それにくらべれば  
彼等はあなたを知らないのです  
知つてゐて大罪を犯すのより  
いくら恕す可きであるか解りません  
寧ろ不憫とすらおもはねばならないものが多いのです  
如何にも彼等はあなたを知らないから  
悪いことをします  
けれど善いこともします  
あなたを知り  
あなたをたよつてゐるものは  
なるほど悪いことも少いでせう  
絶對にはありません  
たゞ比較的といふほどのことです  
悪いことが少いのです



さうです

そして善いこともしないのです

あなたは神様です

あなたの信者をもすこし何とかしてやることはできませんか  
神様

もうやめませう

私はいろんなことを云ひました

濱神此の上もないやうなことまで口走りました

すべて私の正直からです

眞面目からです

悪くおとりになつては困ります

あるひとびとはいひます

みんな嘘だといひます

私のいふ事

あなたの事

みれな嘘だといひます

嘘でせうか

さらに天地開闢のこと

アダムとイヴのこと

その子等のこと

大洪水のこと

バベルの塔のこと

その他のこと

みんな一つとして眞のことではないといひます

さうでせうか

私もさうおもひます

みんな嘘であればいゝと思ひます

みんな嘘であれ



だがこれだけはどうしても疑ふことが出来ない  
それは人間の悪いことです  
それは人間の善いことです  
それからその善い悪いの上になつて  
その善い悪いを自らで審判さいはんしてゐることです  
そして人間の弱いことです  
そして人間のみすぼらしいことです  
けれどそれとよみに  
人間の強いことです  
運命のつきだすその槍の穂尖をほゝゑんでうけうるほど  
それほど強くなつたことです  
あゝ神様  
われわれの大遠祖達があゝの樂園を逐はれてから  
もうどれほどでせう

そのながいながい

とても信じられないほど長い年月のあひだに於て  
そのくるしいくるしい日日の経験から  
これは獲得したものです

人間の性です

そればかりで生きてゐられる人間の唯一のものです

あゝ神様

創世以來の神様

ふるい神様

幻滅の神様

嘘のやうな神様

人間はめざましました

あなたはもう消えてなくならなければなりません  
けれど神様



眞のあなたである神様

理想としての神様

それをわたしはわれ／＼人間にみつけました

眼ざめた人間がそれです

あなたに咀はれた此の大地を

ともかくも樂園とした人間です

その人間です

おゝ新しい神様



こゝにあつめたこれらの詩はすべて人間畜生の自然な赤裸々なものである。それ以外のな  
んでもない。これらの詩にいくらでも価値があるなら、それでよし、また無いとてもそれ  
までた。

自分が詩人としての道をたどりはじめたのは、ふりかへつて見るともうずるぶん遠い彼方  
の日のことだ。そのをりをりの自分が想ひだされる。耽美的で熱狂的で、あるなにもか  
つよくつよくひきつけられてゐた自分、それがなにもだか解らない。自分はそれに惑溺し  
てゐた。それは美のそして中心のない世界であつた。それから自分はいつしか宗教的の侏儒  
であり、中古の煉金士などのあやしい神秘に憑かれてゐた。その深刻さにおいてはすなはち  
象徴そのものであつたやうな自分。嚴肅もそこまでゆくと遊びである。それにおそれおのゝ  
いた自分。そして一切をかなぐりすて、<sup>たましひ</sup>靈魂を自然にむけた。人間も自然もみんなそこで  
は新しかつた。かうして陶酔とも、<sup>たましひ</sup>のまにあとの轡を離れて、自分はさびしくはあつたが一本

の木をやうにゆたかなる日光をあびた。それも一瞬間、運命はすぐかけよつて自分をむごた  
らしくも現實悲痛の谿底に蹴落したのだ。

その谿底でかゝれたのがこれらの詩章である。これらの一字一句はすべて文字通りに血み  
どろの中からでてきた。自分は血を吐きながら、而も詩をかくことをやめなかつた。それが  
これらの詩章である。

人間畜生の赤裸々なる！　こゝまでくるには實に一朝一夕のことではなかつた。

眞實であれ。眞實であることを何よりもまづ求めろ。

暮鳥、汝のかく詩は拙い、だがそれでいゝ。

けつして技巧をもてあそんでくれるな。油壺からひきだしたやうなものをかいてはなら  
ない。

ジョットオの畫、ミケランゼロの彫刻、あの拙さを汝はぐわんねんしてゐるのではないか。  
おゝ何といふ偉大な拙さ！



暮鳥はそれをめがけてゐる。

あゝミケランゼロー 人間が達しえたその最高絶頂に立つてゐる彼の製作、みよその頭に角のはへてゐるモオゼのまへではナポレオンも豆粒のやうだ。

此の偉大はどこからきたか。自分等はそのかげにかのドナテロを見透してはならない。眞實そのものゝやうなドナテロ。

—茨城縣磯濱にて—

大正十年五月十八日印刷

大正十年五月廿五日發行

(定價金壹圓八拾錢)



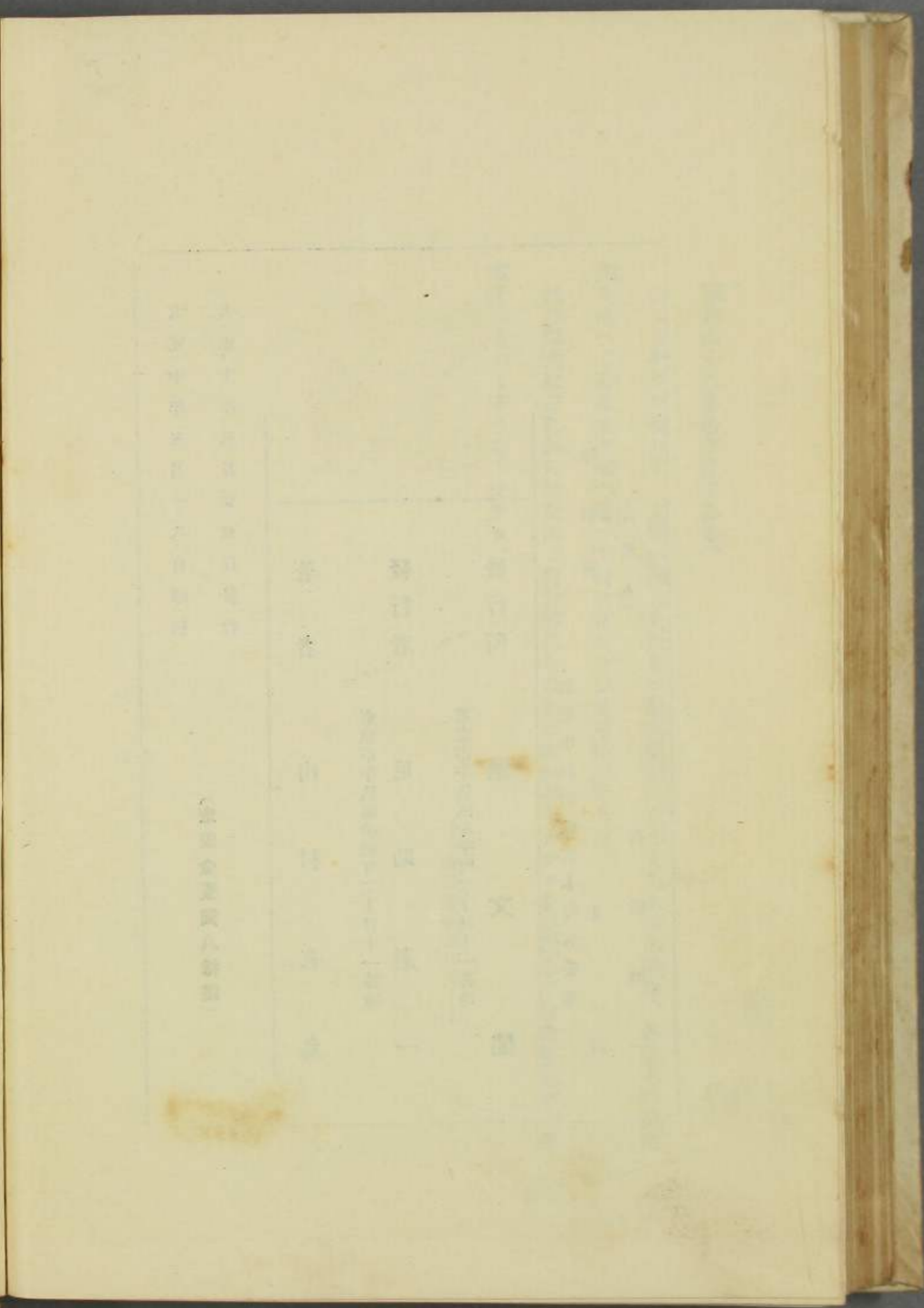
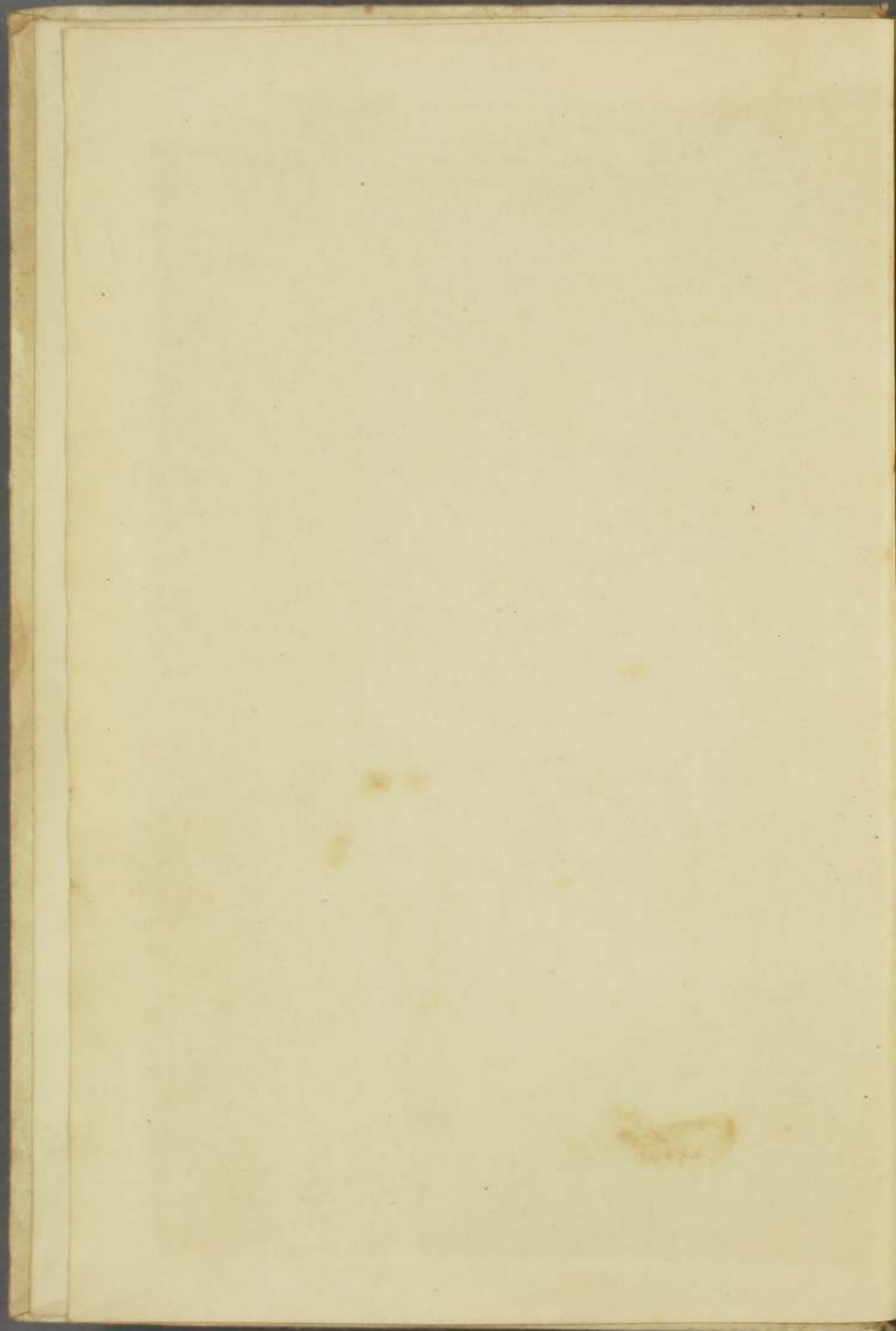
著者 山村暮鳥

發行者 足助素一

發行所 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地 叢文閣

印刷所 東京市神田區宮本町五番地 正中社  
(印刷人) 高橋治一







No. 4422

.90

2